
悪魔の妹ウル

アバドン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の妹ウル

【Nコード】

N6238Y

【作者名】

アバドン

【あらすじ】

2011年の現代、高校1年生の悩める少女がいた。少女は勉強ができ、運動神経もよいことから、まわりの人間に期待され、尊敬されている。しかし、家に帰れば両親は仕事でおらず、いつも独りでの夜食。そんな生活を送っていると、ストレスも溜まり、自殺を考えるようになる。

そんなある日、クラスメイトから『悪魔の館』という都市伝説を聞く。その悪魔は妹を求めており、思春期の自殺などを考えている少女だけが悪魔に出会える。少女はその日の帰り、悪魔と出会って

しまい、妹になる事を決める。それが今以上に過酷な人生の始まりになるとも知らずに。

登場人物紹介（前書き）

それほど長い旅ではなかったです。アバドンが帰ってきました。待っていない人もいるでしょうが、小説の腕を磨いてきたつもりです。ミソログアよりもたぶん面白いはずです。誤字脱字も少ないはずです。

登場人物紹介

名前：ティアマテウス（通称ティア）
種族：悪魔
年齢：24歳
身長：180cm
体重：75kg
武器：バルムンク
髪の色：黒色
瞳の色：右は黄色 左は青色（悪魔化すると両方赤色になる）

この物語の主人公で、性格の悪い悪魔族の生き残り。父の遺してくれた『バルムンク』と共に、父の仇を討つべく力を蓄えている。悪魔は人間形態と悪魔形態に別れている。人間形態では、姿は人間そのものだが、悪魔形態では形は人間でも、姿は化け物のようになるのだ。

悪魔である父・ディアヴォロスと母・ルシアの間に生まれ、兄・ヴェテルギウスと妹がいた。父と母と妹は戦いで命を落とし、兄は行方不明。

名前：ウルティミウス（通称ウル）
種族：悪魔
年齢：16歳
身長：160cm
体重：50kg
武器：金剛宝剣
髪の色：青色

瞳の色：水色

この物語のヒロイン。紺色の制服を着ていて、天道高校に通う勉強ができて運動神経も抜群という。高校ではアイドル的な存在で、テレビの取材も来るくらいだ。現実から逃げたくて、ティアの妹となり、悪魔として生きる道を決めた。

ティアの真の目的を知らず、ただ兄となったティアについて行くだけの日々を送るようになった。

その他の主な登場人物

名前：十六夜 零時いざよい れいじ

種族：死神

年齢：21歳

身長：175cm

体重：70kg

武器：幻魔氷剣げんまひょうけん

髪の色：銀色

瞳の色：青色

ティアを狙う死神の一族。悪魔も人間も嫌いだが、理由も無く殺すということはない。植物や小動物を愛している。

10年前の戦いの生き残り。零時は、ティアに関係する人物を戦いで殺し、手柄を立てている。

名前：秋月 紅葉あきつき もみじ

種族：死神

年齢：14歳
身長：155cm
体重：45kg
武器：炎龍刀えんりゅうとう
髪の色：赤色
瞳の色：橙色

零時の部下で、命ある者から命を奪うのが大好きな少女。可愛い外見とは裏腹に、殺戮を繰り返している。
10年前の戦いには参加していない。

名前：浅沼あさぬま紫苑しおん
種族：死神
年齢：19歳
身長：170cm
体重：55kg
武器：雷龍刀らいりゅうとう
髪の色：紫色
瞳の色：緑色

紅葉と同じく零時の部下。紅葉とは違い、理由もなく他人を傷つけたりはしない。零時の命令は絶対と思っている。
10年前の戦いには参加していない。

名前：ヴェテルギウス（通称ヴェル）
種族：悪魔

年齢：24歳
身長：180cm
体重：75kg
武器：アロンドイト
髪の色：黒色
瞳の色：赤色

ティアの双子の兄。訳あって、孤立している。死神にもティアにも、生きている事は確認されてはいない。

名前：ラ・モール・ファントム（通称ラ・モール）
種族：死神
年齢：51歳
身長：170cm
体重：65kg
武器：煉獄の魔剣れんごく まげん
髪の色：白色
瞳の色：紫色

ティアの父を殺した死神一族の王。ティアがいつか自分と同等の力を持つのを待っている。かなりの力を持っており、その力は、その気になれば町1つ破壊できるほどの力を持っている。

強い者との戦闘を好むだけあって、今のティアには敵として認識していない。故にティアと戦う気は今のところ全くない。

オリキャラ投稿について

名 前：
種 族：
年 齢：
身 長：
体 重：
武 器：
髪 の 色：
瞳 の 色：

それと、服装や、口調などを書いてくれるとありがたいです。

主人公を圧倒したり、世界観を崩すようなオリキャラは採用しません。

種族は何でもいいです。人間でも天使でもナメック星人でもいいです。

登場人物紹介（後書き）

オリキャラを募集しています。兄のような文章力はありませんが、これから良くしていきます。

序章（前書き）

どうも、アバドンです。旅から早くも帰ってきました。

序章

2001年12月31日。ここはフランスの都パリ。凱旋門^{がいせんもん}の屋上で、2人の人物が幾多もの戦いを勝ち残り、最後の決着をしようとしている。1人は白髪の短髪で、ボロボロの黒いライダーズーツに、赤いコートを着ており、右手には青色に輝く剣^{しるぎ}を持っている。そしてもう1人は、赤黒い鎧を纏い、その胸と膝の部分には、ギョロギョロ辺りを見回す血のように不気味な赤色をした目玉がついている。そして右手には、緑色の不気味な邪気を放つ巨大な大剣を持っている。

「今……長きに亘り……続けられてきたこの戦いに、決着をつける時が……ぶは！」

赤いコートを着た男が口を開いたが、最後まで喋る前に血反吐を吐き、その場に座り込んでしまった。

「貴様ら悪魔もこれで終わりだ。この戦いは我が死神一族の勝利に終わるようだ」

鎧の男が、その大剣を構えてゆっくりコートの男に忍び寄ってくる。

「くっ……こんな所で、負ける……わけには……！」

全身に力を入れ立ち上がろうとするが、かなりの出血に疲労が重なり目眩がして、うまく立ち上がる事ができない。

「諦めるのだ。貴様ら悪魔一族はもう……」

一步、また一步と近づいてくる。そしてコートの男まで、あと数歩まで迫って来たそのとき。

「悪魔は……まだ終わらぬ！ ハアア！」

「何を！？」

コートの男は最後の力を振り絞り、その手に持っていた剣を凱旋門から投げ落とした。

「息子よ！！ その剣を持ち、いつか悪魔一族を蘇らせる！ これ

は命令だ！ 放棄することは絶対に許さん！！」

投げ飛された剣は、凱旋門の下コンクリートに突き刺さった。

「まさか、自らの命と同等に扱ってきたあの剣を、息子に託すとは……死を覚悟したのだな……ディアヴオロスよ」

「ああ……私は駄目でも、息子がやってくれるさ」

「フン。まあよい。その息子だけは生かしといてやる」

鎧の男はその大剣を高々と振り上げ、全身の力を込めて振り下ろした。

「いつか思い知るだろう……ラ・モールよ……」

そしてコートの男の身体は縦に斬り裂かれ、1つだったはずの身体が2つになった。悲鳴を上げる暇もなく、コートの男はこの世を去った。

「フ……フフ……フハハハハハハハ！！」

鎧の男は戦いに勝利したことで喜びに満ち溢れていた。その高笑いと同時に、パリの都は、新しい年を迎えた。

それと同じ頃、凱旋門の下では、1人の少年が落ちてきた剣を手に取り口を開いた。

「父上の命令……確かに聞きました。命令を達成するまで、自分はこの剣と共に、この先の人生を歩んでいきます」

そう言つと、少年は背中に剣を装着し、凱旋門に背を向けその場から立ち去った。

序章（後書き）

オリキャラ募集中です。どんどん評価してください。

第1夜「闇の世界」(前書き)

第1夜を投稿します。

第1夜「闇の世界」

2011年10月1日。東京都渋谷区。その町にある天道高校に、1人の少女が通っていた。その少女の名を、クラスメイトや教員は、『神埼 楓^{かんざき ふう}』と呼んでいる。楓は今年の8月15日に16歳になったばかりの高校1年生だ。顔立ちもよく、成績を良いことから、男子だけでなく、女子からも高い評価を受けている。テストでは常に上位にいる。中学の頃は陸上部に所属し、走り高跳びで好成績をこのしてることから、教師からも期待させている。だが、それがストレスとなる事もよくある。

家庭では、両親は夜遅くまで仕事で帰宅してこないため、夜食は毎日1人だけで食べている。そんな神埼には兄妹もいないので、中学の頃から兄妹……なるべく頼りになるような兄が欲しいと願うようになった。

そんな生活が、いつまで続くのか。別に自殺するしたい苦しいというわけではない。ただ、期待されることからくるストレス。家での孤独。それが、いつしか耐えられなくなったときに、ある噂を耳にした。

「ねえ楓！ 『悪魔の館』 って知ってる！？」

授業後に1年D組の教室で、楓を含めて3人で話しているときに、1人の茶髪のクラスメイトが唐突に話しを持ちだしてきた。

「悪魔の館？」

楓は初めて聞くその言葉に、首を傾げる。

「ああ知ってる！ 何か悩みを持った思春期の女の子だけがたどり着ける所だよね！」

そしてもう1人の金髪のクラスメイトが興味のある話なのか、飛び跳ねながら答える。

「それって、何かの映画？」

まあ映画のような感じではあるかもしれない。

「違うよ楓！ 『悪魔の館』っていう都市伝説があるの！」

そして茶髪のクラスメイトは、ゆっくりと怖い話でもするかのように話し始めた。

「それはね、ある悩みを持った思春期の女の子が、町をフラフラしている、いつの間にか知らない場所にたどり着くんだった。そしてその目の前には黒い館があって、その中に入ると悪魔がいるんだって。そしてその悪魔はその人の過去や悩み事を言い当てると、いくつかの質問を繰り返した後、最後にこう聞いてくるんだって……」

茶髪のクラスメイトは口を閉じた。

「……………『悪魔の妹になる気はないか』……………って」

そして金髪のクラスメイトがその質問をする。

「そしてその質問に『はい』と答えると、その人はその悪魔の妹になって、闇の世界へ連れて行かれるんだって！」

茶髪のクラスメイトは話を再開する。

「怖い！」

金髪のクラスメイトは震えながら楓の側に寄る。

「何で女の子だけのの？ どうして妹なの？」

「さあ。ただのロリコン悪魔じゃないの？ ぶっちゃけ、アタシだってその都市伝説、そこまで信じてないんだよね」

「アタシも。実際に見たって子は何人もいるみたいだけど、ホントかどうかねえ」

2人のクラスメイトは、話を盛り上げるだけ盛り上げて、最後には下げてしまった。結局何が言いたかったのか、楓にはよく分かっていなかった。

「ま、楓には悩むようなことなんてないと思うから安心だよな？ じゃね！」

「そうそう。何せ天才少女！ だもんね！ バイバイ！」

最後にそれだけ言くと、2人は教室を出ていった。

（私だって、悩みの1つや2つくらい……。いつその事、その悪魔

の妹になっちゃおうかな……)

そんな事を思いながら、楓もそろそろ帰宅することにした。

今の季節は衣替えて忙しい。まわりの人々は徐々に長袖の服や長ズボンを履く人が増えてきた。楓の通っている高校でも、今は夏服か冬服のどちらでも着て登校して来てもよい期間の最中だ。楓はまだ夏服のままだ。もう少しだけ寒くなったら着るつもりでいる。

(はぁ……また家に帰ったら独りなのよね。お父さんもお母さんも、仕事が忙しいのは分かるけど、それでも少しくらい私と一緒に時間を過ごしたって……)

楓は寂しそうな表情を見せながら、夕方の町を歩いている。はずだった……。

「……………え？ こ、ここ……………どこ？」

気がつくと、さっきまではまわりに人などいくらでもいたはずなのに、気がつくと、辺りはもうすでに暗闇に包まれており、人の気配など全くしなかった。

「どうということ？ これって……………まさか」

『それはね、ある悩みを持った思春期の女の子が、町をフラフラしている、いつの間にか知らない場所にたどり着くんだって』

楓はさっき教室で聞いた都市伝説を思い出した。

(まさか……………そんな！ こんな事が、本当に起きるなんて！)

楓は一瞬目を疑ったが、確かに自分の目の前には話しの通り、洋風な黒い館が、堂々と聳え建っていた。

「夢よ。夢に決まってる。きっと疲れてるのよ。だからこんな夢を

……………」

そして黒い館は、入れと言わんばかりに、まるで意思を持っているかのようにその重そうな鉄の扉が開いた。

「……………」

楓はしばらくどうするか考えたが、帰宅するにしてもどうやってここから戻ればいいのか分からないので、とりあえず噂が本当ならば危険はないはずだと、館の中へとまるで誰かに心を操れているかのように、ほとんど自分の意思とは関係なしに足が動き、館へと入って行った。

中は蠟燭ろうそくが数本あるだけあり、その明りだけを頼りに前へと進んで行く。そしてずっと進んで行くと、目の前には黒い机がと黒い椅子があり、黒い衣服を身にまとった男が椅子に座り、机に足を掛けて座っていた。

「え、えつと……あの……」

「——嫌なのだろう？」

「え？」

少々突然の出来事に戸惑っていた楓に向かって、黒服の男は突然口を動かした。

「まわりに期待されるのが嫌なのだろう？ 昔から期待され続け、それがストレスにもなって疲れ果てている。家に帰れば独りで、構ってくれる家族や、悩みを打ち明けれる友人もいない。そんな孤独な人生に、疲れ果てているのだろう？」

黒服の男は、まるで楓の心を読んでいるかのように楓の本心を言い当てた。

「……そ、そうなんです。お願いします！ 私を……私を助けてください！」

楓は黒服の男に泣きつくようにお願いした。

「……闇は好きか？」

「え？」

「夜は好きか？ 黒は好きか？」

突然黒服の男はいくつもの質問をしてきた。

「え、えつと……や、闇より、光の方が好きです。光の方が、『希望』って感じがしていいです。夜は星や月が綺麗なので、好きな方です。黒より、私は青色が好きです。空が、綺麗な青色をしている

ので」

楓は黒服の突然の質問に、順序よく答えていく。

「……そうか。ならば最後に問おう………悪魔の妹になる気はないか(……)？」

噂通りの質問をしてきた。これで『はい』と答えれば、その者は悪魔にされ、永遠に闇の世界で生きる事になる。

しかしここで『はい』と答えてしまえば、この苦しい生活から抜け出せる。どうせ学校では、心から慕う親友もいない。家に戻ったとしても独りぼっちで、そんな生活が続くぐらいなら、いつそのこと……。

「あなたの……妹になります！」

「……フン。では、この契約書にサインを」

そう言つて、黒服の男はA4サイズの紙と、万年筆を楓に差し出した。楓は黙つてその用紙に自分の名前を記入した。

「書きました」

「……『神崎楓』……か。下らん名だな。喰つてやる」

黒服の男はスウッと空気を吸い込むと、さっき書いた楓の名前が用紙から剥がれ、口の中へと吸い込まれていった。

「契約完了。これでお前は名無しだ。嘘だと思つなら自分の名を言つてみる」

「わ、私の名前は……あれ？」

どういう事だろうか。自分の名前など何よりも先に頭に浮かぶはずなのに、全く浮かんでこない。

「ど、どうして？ 私の名前は……名前は……名前は……！」

「お前の名はウル……ウルティミウスだ」

「ウル……ティミウス？」

「そうだ。名を思い出せないのはオレがお前の名を喰つたからだ。もうお前の前の名はこの世には存在しない。もう2度と思いだす事はないだろう」

そう言いながら黒服の男はあるものを机の下から取り出した。

「それは、何ですか？」

「悪魔の血だ。契約を完了したお前にはまず、悪魔になってもらう」
このとき、悪魔になるという噂は本当だと確信した。そして黒服の男は、瓶に入った血をグラスに注ぎ、机に置いた。

「飲め、と言うことですか？」

「そうだ」

「……………」

多少のためらいはあったが、契約してしまったものは仕方がないので、香りをかいでから、少しずつ喉に通した。味はこれこそが『血』というものだと感じさせるように、濃く、不思議と美味だった。
「飲みました」

「これでお前も悪魔の仲間入りだ。これから遠慮なしにオレの事は『お兄ちゃん』とでも呼ぶがいい。我が妹ウルティミウスよ」

黒服の男はゆっくりと右手を差し出した

「名前を聞いてもいいですか？」

「ティア…………ティアマテウスだ」

「ティアマテウス……………よろしくね、ティアお兄ちゃん」

こうして人間・神崎楓は悪魔・ティアマテウスの妹になった。

第1夜「闇の世界」(後書き)

オリキャラ募集中です。

第2夜「三種の神器」(前書き)

早くも2話目を投稿します。

この話はほとんどティアとウルの会話で物語が進んでいきます。

第2夜「三種の神器」

悪魔の契約書にサインをした神崎楓は、自分の本当の名をティアマテウス（通称ティア）と言う悪魔に喰われ、ウルティミウス（通称ウル）と言う名を与えられた。ティアの妹になったウルは、多少だが正気に戻り、何故こんな事をしているのかと、ティアに尋ねた。

「何故そんな事を聞く？」

質問を質問で返された。

「何故って……気になったから……かな？」

気になる事は聞くのが普通だ。

「まあいい。可愛い妹の問いだ……答えてやろう。何故オレがこんな事をしているのか、何故思春期の女だけなのか」

ティアは、まずこんな事をしている理由を語り出した。

「オレは察しの通り悪魔だ。悪魔一族の生き残りだ」

「生き残り？　じゃあ、お兄ちゃん以外に、もう悪魔はいなの？」

「そうだ。オレたち悪魔はかつて『死神』と言う一族と何代にも亘り戦いを繰り返してきた。その戦いが今から10年前の2001年に幕を閉じた。その最後の大将同士の戦いで、オレの親父は敗れ、戦いは死神の勝利で終わった」

語り続けているうちに、ティアは少しずつ悲しそうな表情を見せってきた。

「しかし親父は最後の力を振り絞って、オレに悪魔一族の未来を託してくれた。その証が、この魔剣『バルムンク』だ」

そう言って、ティアは後ろの額縁に飾ってあった青く美しい光を放つバルムンクと呼ばれる魔剣を手にとり、ウルに見せた。

「バルムンクは圧倒的な魔力を持つ悪魔にしか扱う事はできない。それがオレの親父だけだった。しかし敗れた！　こいつの力を持っ
てしても、奴を斃すことはできなかった！」

次第に怒りが込み上げてきたのか、声に怒りの感情が混ざってき

た。

「戦いは死神の勝利に終わったが、オレは誓った。必ずや親父の仇を討つ……と。そのためには戦力がある。オレ1人ではどう足掻い^{あが}たって奴らには勝てない」

「だから、思春期の悩みを持った女の子たちを？」

「そうだ。悩みを持った若き者なら、何の未練も無く、悪魔となつてくれるだろうと思つたからな」

「そうなんだ……でも何で女の子だけなの？ しかも妹なんて。戦力が欲しいなら、男の子の方が頼りになるんじゃないの？」

それはそうだ。何故わざわざ力の弱い女を味方につけるのか。男の方が力が強く、絶対的な戦力になるに決まっているではないか。

「理由ならあるぞ。1つは、あいつ（・・・）……いや、今人間界つて妹ブームだろ？ だから妹がいいかなって思つてさ」

「え？」

あまりに呆気ない理由に、ウルは固まる。

「それと、人間界のテレビなんか見てると、女は母性本能が働いて、自分の子を命懸けで守ったり、時には浮気した夫に対して、天使から悪魔に変わったりするだろう？ だから下手に男を味方につけるより、女の方が多少力は弱いけど、勇気がある。自分だけ助かるような真似をする奴は少ないと思つてな」

確かにそうだ。最近のテレビでは、『怖い女』とか『強い女』なんてタイトルをつけて、放送しているテレビ局もある。逆に、『怖い男』『強い男』なんてタイトルのものはほとんどない。強い男は、いるにはいるのだが、大した悩みを持っていない奴が多い。ほとんどの確率で男は変態でヘタレだ。

これはあくまでティアが調べた結果だ。全員がヘタレで変態で、悩みを持っていない幸せな奴とは言っていない。

だが、ティアは本当にそんな理由で『妹』を求めているのだろうか。ウルは何か引つかかっていた。

「そんな奴らよりか、いい女を味方につけた方がいいだろ？ それ

に……………」

と、言いかけたが。

「それで、何？」

「いや、何でもなし。これでオレの事は大体話したな。ああ、言い忘れていたが、もう家に帰っても学校に行っても、誰もお前の事は覚えていないからな」

「はい…………え？ それってどういう事！？」

ティアの衝撃的な一言に、ウルは思わず椅子から立ち上がり、机をバンツ、と叩く。

「お前の前の名はオレが喰っちまったんだ。喰われた名の人物は、もうこの世には存在しねえ。永遠に…………死ぬまで闇の世界の住人として生きなければならぬ」

「そんな…………」

「今の生活が嫌でサインしたんだろ？ それなのに、今までの生活が送れないって分かると、契約を破棄するのか？」

「そ、それは…………」

ウルの目には少し涙が滲み出ている。

「安心しろ。別にお前の関係者を殺したわけじゃない。リセットしただけだ。また関係を築きたければ好きにしろ」

自分の目的のために他人を道具のように扱うこの男は、まさに悪魔だ。しかしそれには、ちゃんとした理由があるからだった。

「オレはただ妹が欲しくてお前を悪魔にしたわけじゃない。ちゃんとした目的ならある。それがまず、三種の神器を集める事だ」

「テレビ・洗濯機・冷蔵庫…………？」

「そっちじゃねえ。『やたのかがみ八咫鏡・やさかにのまがたま八尺瓊勾玉・あめのむすくものつゐ天叢雲剣』だ。そんな物集めてどうするんだ？」

間違った名前を言ったウルに、ティアは訂正した。

「え。違うの？」

当たり前だが違う。今頃そんな物集めてどうしようというのだ。

「で、それはどこにあるの？」

「ああ……それが分らないんだよなあ。昔は悪魔がそれ相應やしろの社まじを建て、祀まつっていたのだが、死神がそれを世界中に散らばらせてしまつてな。今ではどこにあるのか分からん」

ティアは机のまわりをウロウロと歩きながら、顎に手をあてて話した。

「世界は広い。虱潰しみつぶししに探していたんじゃ、一生が終えてしまう。そうしたらいいものか……」

「私、お兄ちゃんが探してるのもかどうか分からないけど、それらしい物なら知ってるよ」

「ああ……そうだよな。探す方法なんて………つてマジで!?!どこだ!?! どこにある!?!」

ティアは急に興奮し出し、ウルの肩を掴んで場所を尋ねた。

「う、うちの近くの小さな社があるんだけど、そこに、とても古い鏡が祀まつられているの」

「それだ……すぐその場所に案内してくれ!」

「あ、う、うん」

ティアとウルはその場所を目指し、人間界に降り立った。さつきまで2人がいた空間は、ティアが自分の魔力を使つて作ったティアだけの空間。つまり突然その場所にたどり着くのは、ティアが招いているからだ。それを興奮のしすぎでウルに説明する事を、ウルもまた、ティアがあまりに興奮しているものだから、聞くのを忘れてしまった。

人間界に降り立ったティアとウルは、ウルの家の近くにあるといふその小さな社に向かった。

「ここだよ。この社の中にあるはずだけど……」

ウルは社についている小さな扉を開いた。すると、中には予想通り鏡らしいものが入っていた。

「あつた！　これだよ！」

「どれどれ……お、確かに八咫鏡だ！　よくやったぞウルよ！　これで1つ目の神器……ゲットだぜ！」

何かどこかで聞いたことのある様な言い方をし、右手に持った八咫鏡を高々と、月や星たちが輝いている闇色の空へと持ち上げた。

「よかったねお兄ちゃん！　あれ？　何かついてるよ？」

「あ？」

鏡についていたそれを見ると、何やら数字が沢山書かれているA4サイズのコピー用紙を半分に切ったものだった。切り口が雑なので、おそらく手で破いたのだろう。

「……14・5・23・25・15・18・11に行け……？　これどついう事？」

「さあな。コピー用紙がまだ新しいから、おそらく最近貼られたものだろうが……子供のいたずらか、それとも、三種の神器の事を知っている何者かがやったのか……？」

ティアの眼つきが鋭くなる。

「気をつける。まだ用紙が温い。先程まで誰かが触れていた可能性がある。時刻は……深夜2時。子供が起きている時間じゃないな。やはり——死神か？」

ティアは左腕につけていた腕時計で今現在の時刻を確認する。

「ちよっとお兄ちゃん！　脅かさないでよ！」

死神という言葉に、ウルは怯え、ティアの腕にしがみついた。ティアも敵がいる事を警戒したのか、ウルを自分の身体へさらに密着させた。

「まずはこの暗号が何を示しているのか解かないとな」

ティアはコピー用紙とにらめっこを始めた。頭をフル回転させ、この数字が一体何を示しているのかを考える。ウルも少なからず書かれている数字に目を通し、答えを導き出そうとしているのだが、全く分からない。こういう謎々的なものは、ウルは得意ではないようだ。だからと言って、ティアが得意と言っわけではない。

すでに解き初めてから1分が経過していた。敵がすぐ近くにいるかもしれないという緊張感の中でこれを解くのは、かなり難しい事だろう。頭を謎々の方に集中させていると、後ろをとられていても気付かない恐れがある。

「……………そうか！ 分かったぞ！」

「え！ 分かったの！？ 何て意味なの！？」

ウルは謎々の答えをティアに求めた。

「つまり三種の神器の2つ目がある場所はあるのか……」

第2夜「三種の神器」(後書き)

誤字脱字があるかもしれません。

オリキャラはまだ募集していますが、1度投稿した人はなるべく投稿を避けてください。

第3夜「封印の社」(前書き)

今回はティアが戦うようです。

戦うといっても、戦闘が本格的にあるのは次回からですけど。

第3夜「封印の社」

三種の神器の1つ目・八咫鏡を手に入れたティアは、そこに貼られていた紙に書いてある謎々を解く事に成功した。

「ねえお兄ちゃん！ それで何て書いてあったの！？」

「まあ落ちつけ。オレの朝は1パックのプリンから始まる」

「え？」

ティアは突然にも、謎々とは全然関係のない話題を持ち出してきた。

「昼は2パック。夜は3パックのプリンを食べる……」

それからしばらく、ティアがプリンについて語り始めた。クリームをつけてサランボを頂上に乗せて食べれば、さらに美味だとかプリンの話しをしているかと思いきや、突然話題がチョコレートに変わったり、飴玉、かき氷に変わったりした。どれにも共通するものといえば、お菓子であり、甘いものである。

そう、つまりティアは甘い物が好きなのである。というより甘い物しか食べないといっても過言ではない。何故ここまで甘い物が好きなのかは不明だが、1つ分かっている事は、特に頭を使っているから糖分が必要だというわけではない。とにかく甘い物が好きだという事は分かっていたただけであろうか。

「……というわけで、つまりオレの晩飯はお菓子ではなくてはいけないわけであつてだな……ん？ どうしたウルよ？」

「そ、そんなどうでもいい（……）事よりも早く答えを教えよ！」

くだらない話を黙って聞いているのは限界に達したようで、ウルがティアの耳元で近所迷惑にならないほどの声で叫んだ。

「ど、どうでもいいって…… まあ謎々は意外に簡単だった。答えは『ニューヨーク』だ」

「どうして『ニューヨーク』なの？」

「あの数字はアルファベットを表していたんだ。つまり1はA。2はB。3ならCってな」

「……なるほど！　そういう事だったのね！」

ウルもどという規則性だったのか理解できたようだ。流石は高校で学年上位に君臨し続けていただけの事はある。

どという事かと細かく解説すると、つまり14はN・5はE・23はW・25はY・15はO・18はR・そして11はK。これを左から並べると『NEW YORK』となる。答えはつまり『New York』ということになる。

こういった謎々は、数字の規則性さえ分かれば、簡単に解くことができるのだ。

「よし、じゃあ明日にでもすぐにニューヨークに出発だ」

「どうやって行くの？」

「飛行機でも船でも何でもいい。悪魔に人間の乗り物を使ってはいけないという規則はない。では逆に聞くが、お前はどやって行きたい？」

「えっと……乗ったことがないから、飛行機で連れてって欲しいなあ……なんて。てへっ、無理かな？」

ウルはちよつと可愛らしく首を傾げて下を少し出して甘えるようにしてお願いしてみた。

「可愛くないからやめろ」

しかし悪魔であるティアには通用しなかった。その一言で、ウルはムスツとして頬を膨らませた。

「じゃあ明日の11時の便（NH10）に乗るか。ウル、もうお前には行く場所も無いのだ、これからは兄妹仲良く一緒にあの館で暮そうな」

そう言つて、ティアは笑いながら小さい子の頭を撫でる様な感じで、ウルの頭を優しく撫でた。

「う、うん」

ウルは少し頬を赤く染めて、ティアの顔をしばらくジッと眺めて

いた。そのとき初めて、ティアが本当の自分の兄となってくれたのだと、確信した。

「待て」

あの空間に戻ろうとしたそのとき、空から何者かの声が聞こえた。空から聞こえたのだ。普通の人間ではないことは確かだった。

「誰だ？ 今良い雰囲気なんだ。邪魔するな」

「やはりその程度の謎々ではあつさり解かれてしまうようだな」

電信柱から一回転しながら降りてきたのは、紺色のジーンズに白色のＴシャツの上に緑色のフード付きジャケットを着ている銀髪の男だった。

「デメエは……死神か？」

「今はそれだけ名乗っておこう。ラ・モール様のお言葉を伝えに来た」

「ラ・モールだと！？」

ティアは『ラ・モール』という名に反応する。

「貴様が三種の神器を簡単には手に入れないように、ラ・モール様は世界各地にばら撒き、１つ１つに次の神器の場所を示す謎々を用意した。三種の神器をすべて手に入れ、力を我がものとし、いつかラ・モール様の元へ行くんだな」

銀髪の男はそれだけ告げると、ティアに背を向け、暗闇へと歩き出した。

「ああ、それと、貴様の实力を知る為、三種の神器があるすべての場所に、幻獣を封印させてもらった。三種の神器を手に入れたければ、その幻獣を斃すがいい」

一旦止まり、ティアに背を向けたまま、銀髪の男は暗闇へと姿を消した。

「幻獣……だと？」

あの銀髪の男の言葉が本当なら、今この場所にも幻獣が封印されているはずだ。

「……………」

ティアはウルを後ろ避難させ、少しずつ鏡が祀られていた社から離れていく。そしてバルムンクを構え、戦闘の準備が整った次の瞬間、社がガタガタと揺れ始め、その下から社をバラバラに破壊して、3つの頭を持つ犬のような幻獣が姿を現した。

「ワフオオオオオオン！！」

幻獣は遠吠えをした。

「こいつは地獄の番犬ケルベロス！」

ケルベロスは、ギリシア神話における冥界の番犬。ローマ神話ではケルベルスという。その名は「底無し穴の霊」を意味する。ヘーシオドスの『神統記』によれば、50の首と青銅の声を持つ怪物で、テューポーンとエキドナの息子とされている。

しかし、一般的には3つ首で、竜の尾と蛇の鬣たてがみを持つ巨大な犬や獅子の姿で描かれる。死者の魂が冥界にやってくる時には友好的だが、冥界から逃げ出そうとする亡者は捕らえて貪り食うという。これが地獄の番犬といわれる由来である。

また、この獣の唾液から猛毒植物であるトリカブトが発生したとされており、ヘーラクレースによつて地上に引きずり出された時、太陽の光に驚いて吠えた際に飛んだ唾液から生まれたといわれている。ハーデースの忠犬といわれる。また、2つ首の頭を持つオルトロスは、ケルベロスの弟にあたる。ソロモン72柱の魔神の1柱、ナベリウスと同一視されることもある。

3つの頭が交代で眠るが、音楽を聴くとすべての頭が眠ってしまう。ギリシア神話では、豎琴の名手オルペウスが死んだ恋人エウリュディケーを追つて冥界まで行く話があるが、そのときも豎琴で眠らされている。

また、甘いものが好きで蜂蜜と芥子けしの粉を練つて焼いた菓子を与えればそれを食べている間に目の前を通過することが出来る。アイネイアースを連れたクマイのシビュレーや、ペルセポネーに美を分けてもらいに行ったプシューケーはこの方法でケルベロスをやり過ご

した。その後この菓子はカローンへの渡し賃にもなっている。ただし、プシューケーがこの時カローンに渡したのはオボロス銅貨で、ケルベロスに食べさせたのは堅パンで、シビュレーが食べさせたのは睡眠薬入りの酒に浸したパンだともいわれる。そして、後にこのことから厄介な相手を懐柔する賄賂の意で「ケルベロスに与えるソップ」という言葉が生まれた。

ダンテの『神曲』『地獄篇』にも登場し、貪食者の地獄において罪人を引き裂いていた。

「とんでもない化け物と対決する事になったな。ウル、こいつはヤバイから、下がって……」

「グワアアア！」

「お兄ちゃん危ない！」

合図なくケルベロスはティアに襲い掛かる。

「ハアッ！」

ティアはウルを左腕で抱きかかえ、空中に飛び上がった。

「きゃっ！」

「大丈夫かウル？ 怪我は？」

地面に着地すると、ティアはすぐにウルの身体に傷がないか確認する。悪魔のくせに人間の兄らしい事をする。

「大丈夫よ。それより……」

「ああ」

ティアはゆっくり立ち上がり、バルムンクを構える。

「3話目にしてやっとオレの戦闘シーンだな。デビュー戦って事なら、さらにやる気が出る」

「ワウオオオオオオオン！！」

ケルベロスがティアの位置を確認し、再び襲い掛かってくる。

「させるか！」

今度は避けずに、バルムンクでケルベロスを斬り裂こうとしたが、相手もそう簡単には斃されてはくれない。頭の1つがバルムンクを銜え、ティアの動きを止めた。続けてその傲慢の爪でティアの腸に

攻撃を与えた。

「ぐわっ！」

思わず悲鳴を上げてしまう。しかし妹が見ている前なので、どんなことがあっても勝たなくてはならない。

「ちょ、調子に乗るなよワン公！」

力押しでバルムンクを銜えていたケルベロスの首の上半分を切り落とした。

「グワアアア！」

ケルベロスが怯んだ隙に、バルムンクを構え直し、こう言い放った。

「I will enjoy……（楽しもうぜ……）」

第3夜「封印の社」（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

小説に関して評価してくれるとありがたいです。

第4夜「涙（ティア）」（前書き）

今回はケルベロスとティアの戦闘がメインです。
始めの敵なのでそこまで念入りはしていませんが。

第4夜「涙（ティア）」

睨み合うティアとケルベロス。それを遠くから眺めているウルは、あんな犬のお化けにティアは勝てるのかと不安な気持ちでいる。

「すう……はあっ！」

ティアはケルベロスの間を見つけ、斬りかかった。

「グワアア！」

「くっ！」

しかし右の爪で、弾き飛ばされてしまい、元の位置にまで戻った。そこからティアはケルベロスをつまむように横方向に走った。ティアを目で追っているケルベロスも、一緒になってクルクルとその場で回ったため、目が回ってしまったのか、若干足元がふらついている。

「今だ」

ケルベロスの体勢が不安定になったのを確認したティアは、ケルベロスの背後から斬りかかった。

「グワアアア！！」

見事ケルベロスの尻尾を斬り落とす事に成功した。しかしまだ喜んでばかりもいられない。尻尾を斬られた事で、ケルベロスは我を忘れるほどに怒り狂った。

「グワアアアアアア！！」

怒り狂ったケルベロスは、3つの口から唾液を大量に垂らしながらティアに突進してきた。

「はっ！」

ティアは華麗に宙を舞い、ケルベロスの攻撃を避け、後ろに回った。ただ勢いにまかせて突進してきたケルベロスは、民家の塀に激突し、塀は爆発でもしたかのような騒音をたて、崩れ落ちた。

「後で直しかねえとな……」 ったく、余計な仕事増やしやがって」

ティアは勢いをつけてケルベロスに向かって走り、その途中で空中にジャンプし、一回転をして、バルムンクをケルベロスの背中を

突き刺した。

「グワアアアアア!!」

突き刺さったバルムンクは、腹まで到達し、さらに力を銜えて、貫通させた。

激しい痛みによってケルベロスは暴れ回り、何度も塀や民家の壁に激突している。ティアはその上で、暴れ牛を抑えるかのようにしてバルムンクを突き刺した状態で、自分も振り落とされないようにしてケルベロスの体力が無くなるときを待った。

「グアアアアアア……グアア……グアッ………」

次第にケルベロスは大人しくなり、そして最終的に力尽きて、その場に倒れこんだ。

「クウウン………」

まるで犬が飼い主に甘えるような悲しい声を出し、ケルベロスは静かに目を閉じた。

「はぁ……はぁ………」

ティアは戦闘で疲労が出たのか、息を荒くなった。そしてケルベロスの背中から降りると、今度は1番右にある頭の耳に、そっと顔を近づけると、ヒソヒソ話してもするかのように静かに、そして優しく囁いた。

「悪いな。お前に恨みはないが……その魔力、頂くぞ………」

そう言い終えると、ティアはケルベロスを優しく抱きかかえるようにして、ケルベロスのその大きな身体に身を寄せる。ケルベロスの身体とティアの身体が、まるで共鳴しているかのごとく、美しい青色の光に包まれた。

「……………」

少し離れた場所からその光景を見ていたウルは、感動して声も出なかった。

そしてしばらくすると、青い光は消え、ケルベロスの死骸もその青い光とともに消えてしまった。

「……お兄ちゃん、何をしたの?」

「……ケルベロスの魔力を頂いたのだ。魔力の量で、その者の強さが変わる。魔力は体力とは別に存在する。魔力の器は修業さえすればいくらでも大きくできる。まあ生まれつきで大きい者もいれば、小さい者もいる」

ティアは魔力について語っている間、1度もウル顔をしようとせず、ケルベロスが倒れていた場所をジッと見ながら語った。

どうしてかと気になったウルが、少しだけ見ようとして下から覗き込むと……。

「……！」

衝撃的だった。

どんなことがあっても涙を流さないようなこの冷酷な悪魔が、その青色の瞳と黄色の瞳から少量だが、涙を流している。その涙はダイヤのように輝いている。そして、そのときのティアの表情は、まるで遺族が亡くなったような悲しい表情をしていた。

（お兄ちゃん……）

ウルはそんなティアをますます尊敬し、好きになってしまった。

「……さあ、ウル。もう、帰ろう……」

「うん……」

ティアはいつまでも泣いているわけにもいかないの、無理矢理コートの袖で涙を拭きとって、ウルに無理矢理作った笑顔を見せながら、『帰ろう』の一言を言った。

ウルも涙の事は何も聞かなかった。そのまま、ティアの後ろをついて行くだけだった。

朝が来た。しかしティアの作りだした空間では24時間365日夜なので、朝が来たのかどうか、素人のウルには分からなかった。だから寝坊して怒られるのも嫌なので、時計を見て目覚ましを掛け、ティアよりも早く起きようとしていた。

「ガア……ガア……」

案の定ティアはまだ寝ている。

「お兄ちゃん凄い豪華なベッドで寝てるのね」

ティアは悪魔に相応しいような赤い高級感が溢れるベッドで寝ていた。しかもトランクス1枚で腹を掻きながら。まだ24歳なのだが、もうかなり中年に近い。これが昨日の夜泣いていた男と同一人物だとは思えない。

逆にウルは、隣の部屋で寝ていたのだ。その部屋は何故か和室だった。そして部屋には丸い机と押入れと布団があるだけだった。妹に対しての扱いが酷過ぎるのではないか。居候という立場のようなものなので、文句は言えないが、ティアの部屋のドアを閉めようとする直前で、ウルはティアに聞こえないようこう呟いた。

「バカ……」

「……………（ピク）」

そしてウルはゆっくりと扉を閉めた。

「さてと、お兄ちゃんが起きる前に朝ご飯作るのかな！」

と、スキップをしながら台所へと向かった。館の中は意外と広く、台所がどこにあるのかはすぐには分からなかったが、15分ほどウロウロしていたところ、やっとたどり着くことができた。

中は意外に普通だった。どこの料理店にもあるような感じの雰囲気を出しており、特別に不思議な点は見つからなかった。

「冷蔵庫……」

当たり前だが冷蔵庫くらいある。大きさは大・中・小と3つあった。どうせお菓子ばかり入っているのだろう、と思って小の冷蔵庫を見てみると、その中身は意外にも普通だった。

「家庭的な感じね」

野菜や卵、肉やその他いろいろ入っている。醤油やソースといった調味料もセットしてあった。が、冷蔵庫以外を探しても、お菓子らしきものは見当たらなかった。

「お兄ちゃん、お菓子好きとか自分で言ってたのに、お菓子がひと

つも置いてないのね」

そんな事を思いながら、ウルはフライパンを使って、卵焼きを作り始めた。

まず、ボウルに卵を割り入れて、よく溶きほぐし、出し汁、砂糖、塩を入れてさらによく混ぜる。次に卵焼き器を十分に熱し、サラダ油をなじませ、先程作ったものを少しずつ流し入れ、焼く。これを2本作った。そして、焼き上がれば巻きすで巻いて形を整えしばらくおき、適当な大きさに切った。

そんな感じで卵焼きは完成した。それから味噌汁、焼き魚などを作ったが、1番の主役のような存在であるお米がない。米はあるが炊いてなかった。仕方がないので、お米なしの朝食になったが、まあ炊いていなかったティアが悪いことにした。

「さて、お兄ちゃん起こしに行こうかな」

薄い桃色のエプロンを揺らしながら、駆け足でウルはティアの寝室まで行った。

「お兄ちゃん、朝食できたよ」

と、扉を開けると、ティアはまだ寝ていた。

「お兄ちゃん起きて、朝食一緒に食べようよ」

そうやって優しく身体を揺するのだが、起きる気配が全くない。

「……………ウル……………」

と、寝言を言っただけで起きる気配はない。

ウルは叩き起こすわけにもいかなないので、しばらくティアの寝言を黙って聞いている事にした。すると……………。

「……………ウル……………ウル！」

次第に魔されているかのようにハッキリと口で言いながら、突然起き上がった。

「おっ、お兄ちゃん！ 大丈夫！？」

「え……………あ、ああ……………悪い。それより、どうした？」

まるで悪夢にうなされていたかのように、額には汗が滲み出ており、髪は汗で湿っていた。

「ちょ、朝食できたから、呼びに来たの」

「そうか。すぐに行くから、先に食べていてくれ」

ティアは俯いたまま頭を押え、ウル顔は見ずにそう言った。

「う、うん。お兄ちゃんも、早く来てね」

ティアの様子が変わると、ウルは気づいてはいたが、ティアの身体が震えている様子を見ると、しばらく1人にしておいた方がいいと考えた。

（また……この夢か……クソツタレ………）

第4夜「涙（ティア）」（後書き）

この小説を評価してください。誤字脱字がありましたら、お教えください。

オリキャラについては、まだ募集していますが、1人につき、1人だけにしてください。

第5夜「行動開始」(前書き)

今回はウルとティアがニューヨークに旅立ちます。
そして、予想しなかった敵が姿を現します。

第5夜「行動開始」

2011年10月2日。悪魔であるティアが作りだした空間で、ティアとウルは（景色は夜なのだが、時間的には）朝を迎えていた。ウルは、兄であるティアの為に少しでも早く起きて朝食を作ったのだが、悪夢でも見たのかティアの様子はおかしかった。そんな兄を心配しながら独りで食べる朝食など、何の味もしなかった。

（お兄ちゃん……）

ただ音もない空間で独り、ウルは自分で作った朝食を口に運んでいた。

「よっ、待たせたな」

先程とは雰囲気も変わって、昨日と同じ（黒いライダースーツにコートを羽織った）格好をしたティアが入ってきた。

「あ、お兄ちゃん。もう大丈夫なの？」

「大丈夫だ。問題ない」

白い牙をキラんと光らせ、笑顔を見せる。

「お、美味そうだな。いただきます」

ティアは目の前に置かれていた朝食に目をつけると、箸に手を伸ばした。器用に操り、手を震わすことなく挟んだ卵焼きを口まで運んだ。

「……うん、美味しい。ウルって料理上手なんだな」

「本当に、美味しい？」

「オレが美味いって言ったら美味いんだよ。安心しろ。お前がせっかく作ってくれた朝食だ。美味くないわけないだろ？」

ティアのその優しい言葉に、ウルは嬉しくなって、涙が滲み出てきた。

「あ、オレ、何か気に触るようなこと言ったか？」

「うっん……違うの。私……誰かに『美味しい』って言うてもらっ

たの、初めてだから。う、嬉しくって……ごめんね」

ウルは涙を手で拭いながら必死にティアの顔を見ようとする。しかし、どうしても涙が邪魔をして、しっかり見る事ができない。

「何でお前が謝るんだよ？」

ティアは苦笑する。

（そうか……そうだったな。ウルはこうやって誰かと食事するなんて、ほとんど無かったんだな）

涙で食事が進まないウルをよそに、ティアは黙ってウルの作ってくれた朝食を口に運び続けた。

今まで独りの食事が2人になった途端、これだけ温かく感じるものだとは、ウルはこの時初めて実感した。

「ウル、早く食べないと飛行機に遅れるぞ」

「うん。だけど……もうちょっとゆっくりしていい？」

「……ああ」

ティアはウルの頼みに優しく微笑んで答えた。

ティアもまた、ウルと同じなのかもしれない。思えば、ずっとウルと出会うまで、たった独りでこんな広い空間に閉じ込められていたようなものだ。いくら悪魔とはいえ、長い間独りでいる事は少なからず辛く感じるはずだ。

ウルの気持ちが理解できたのは、ティア自身も、ウルと同じような道を辿って来たからなのかもしれない。

朝食を食べ終えたティアとウルは、成田空港まで来ていた。この空港からニューヨークまでの便に乗るのだ。

「ニューヨークに到着するのが夜の9時30分か。出発して12時間30分で到着するな。え」と……オレたちが乗る便はNH10だから……あっちだな」

「お兄ちゃんってよく空港利用するの？」

「しねえよ」

と、一言だけ。

「じゃあ何で11時にニューヨーク行きの便が出発するって知ってるの？ 謎々の答えがニューヨークだって知ってたわけでもなさそうだし、事前に調べる事なんてできないよね？」

「ああ……説明してなかったか。まあずれ分かる」
説明しないのかよ。

「まだ時間はあるから、ジュースでも飲むか？」

「うん。暖かいココアが飲みたいな」

「ココアね……あ」

コートのポケットから高級そうな黒い財布を取り出し、小銭を取り出そうとしたら、100円玉が落ちてしまった。落ちら100円玉はそのままコロコロと2、3M先まで転がっていき、立っていた男の靴にあたって、ようやく止まった。

男は高校の制服らしい服装をしているが、身長は2Mほどあり、服の上がからでも分かる鋼のような肉体を持っている。

「……どうぞ」

男はまるで100円玉が転がってくるのを待っていたかのように素早く拾い、ティアに手渡した。

「サンキューな」

と言ってティアが100円玉を手に取りうとしたそのとき、男が再び口を開いた。

「悪魔め……」

「あ？」

男は一言だけそう言った。『悪魔』という言葉に反応したティアが、男の顔を確かめようと視線を男の顔に移した瞬間、予想外の事が起った。

「ぐっ……ぐわっ！」

その男は拳を使いティアの腹部に強烈な一撃を与えた。その衝撃でティアは吹き飛び、その後ろに並べた椅子に衝突した。

「お兄ちゃん!?」

ウルは思わず叫んでしまう。

「悪魔め……消滅してしまえ」

「何すんだこの野郎!」

ティアは床に固定されているはずの椅子を蹴り飛ばし、男を睨みながら再び男の元へ近づいていく。

「テメエ人間だな? 人間のくせにオレが悪魔だと分かるという事は悪魔被い師か陰陽師か……それとも……」

「代行者と呼んでもらおう。悪魔などに本名を知られたくないのである」

男は妙に勝てる自信があるかのように振る舞う。ティアもその態度に段々イライラしてきたのか、男の顔面に蹴りを入れた。

「ゴチャゴチャうるせえんだよ。クソカス野郎が」

「……………甘いな」

「なっ!」

ティアの蹴りでもビクともしないその男は、そのままティアの左足を左手で握り、数回だけ振り回して壁にぶつけた。それはまるで子供が人形でも投げるかのように軽々しく投げた。

「がはああ!」

その衝撃で壁は少し崩れてしまった。

「お兄ちゃん! しっかりしてお兄ちゃん!」

ウルはティアを心配して駆け寄る。

「クソツタレ……!」

「どうしてこんなことするんですか!? お兄ちゃんは何も悪い事はしていません!」

その男の行動にウルは怒りを覚え、怒鳴りつけた。その目からは怒りや悔しさの籠った涙が滲み出ていた。

「えっ……う、そ、それは……ああ……」

するとウルの顔を見た途端、男は突然態度が変わり、顔を赤く染めた。

(あ？ こいつ……なるほどな)

ティアは何かに気がついたようにニヤツと笑う。

「ウル、もっと言えば」

「え？」

「いいから」

おそらくここから先はほとんど演技だろう。

「うん…… どうしてこんなことするんですか！？ 教えてください」

！ 兄は何もしていません！ なのに…… どうして……」

ウルはついに公衆の前面で泣き出してしまった。その光景を目撃した周りの人々の視線は、代行者へと向けられた。

「はいはい。ちょっと退いてください」

そして人混みの中からついに警備員まで来てしまった。

「ちよつ、俺は悪くない！ 悪いのはあの悪魔！」

「話しは署の方で怖いお巡りさんに話してね」

「あつ、ちよつ！ おいお前！ 代行者である俺に悪魔であるお前がこんな事をするとはどういうことか分かってんだろつな！ 覚えとけよ！」

そんな事を叫んでいたが、ティアはなるべく記憶に残らないように目を瞑り、両手で耳を塞いでいた。

結局代行者はパトカーに乗せられるまで叫んでいた。

「……アカデミー賞ものの演技だったぞウル」

ティアが頭を上げ、ウルの顔を見る。

「でもいいのかなあんな事しちゃって。あの人まだ高校生だよね？」

ウルは優しい。敵(?)である代行者を心配するなんて。しかし逆にティアは代行者の事はどうでもいいらしく。

「ああ言うのが1番つまらねえ人間だ。クールに出てきたと思えば、すぐにいなくなる。たぶんまたどこかで会うだろう」

だが、奴にそれ相応の実力があつたことは確かだ。そして再び出会つような事があれば、下部にでもしようと、考えているティアで

あった。

「あ、ヤベ。もうすぐ飛行機が出る時間だ。急ぐぞウル」

「あ、待ってよお兄ちゃん！」

ウルは急いで、駆け足で移動するティアの背中を追って行った。

第5夜「行動開始」(後書き)

オリキャラはまだ募集しています。ただし1度投稿した人は投稿して来ても採用しません。どうして2人投稿した場合はどちらかにします。

この小説がどれくらいのものか、読んだ後に評価してくれるとありがたいです。

第6夜「イブの夜」(前書き)

今回は過去篇となっております。

ティアの過去が明かされます。そして因縁の相手との出会いが・・・。

第6夜「イブの夜」

1999年12月24日。ティア12歳のクリスマスイブ。ティアは1人、ニューヨークのある広場に堂々と聳え立っているクリスマスツリーを見上げていた。周りには若いカップルや家族が大勢いる。その中で、ティアは1人だったため、通りすがりの人に「迷子？」と聞かれる。その度にティアは「違う」と答える。

そんなティアにまた、1人の女性が近づいてきた。

「……どうしたのぼく？ 1人でイブを過ごすなんて寂しくない？」
「冗談はやめてください母上。母上がここで待っていると申したので、ここにいないのですか」

そのティアに母上と呼ばれる女性の名はルシア。眩しいくらいの金色のロング。夜の闇とは反対に、町を照らすツリーや夜空に浮かぶ星の輝きと共鳴して、更なる輝きを放っていた。服装は灰色のコートに茶色のブーツを履いていた。しかし赤い手袋やマフラーがそれ以上に目立っている。

「お兄ちゃん怒ってるの？」

ルシアの後ろから金色のルシアそっくりの髪色と顔をした女の子が姿を現した。

「ウルティミウス……違うよ、ちょっと母上とお話ししてただだよ」

「怒ってない？」

ウルティミウス（通称ウル）と呼ばれるその少女は、ルシアのコートをギュッと握り、ティアを見つめた。服装は、ルシアとほぼ同じ格好だ。

「怒ってないよ。あ、そういえば父上と兄上は？」

ティアはウルの頭を優しく撫でると、再びルシアと顔を合わせた。
「変ねえ。もうすぐ来るはずなんだけど……」

そう言いながら、ルシアは、周りを見渡した。すると、それらし

い人影を見つけたのか、その人影に向かって大きく手を振った。

「あつ、あなた！ ヴェル！ こっちこっち！」

まるで子供のように2人を呼ぶその姿に、ティアは本当にこの人が自分の母親なのかと、疑問を抱いてしまう。

「すまない。予定の時刻より少し遅れてしまったな」

先に口を開いたのはディアヴォロス（通称アヴォス）だ。血のよ
うに赤いコートがとても目立っている。

「ティア、母上とウルの身には何もなかっただろうな？」

「大丈夫です兄上。何の問題ありません」

次に口を開いたのはヴェテルギウス（通称ヴェル）だ。ヴェルと
ティアは双子の兄弟なので、同じ黒色のコートを着ている。

「しかし父上の人間好きにも困ったものだ。イブの日に家族で出か
けるなど、どうしてそこまで人間の真似事を？」

ティアは右眼を瞑り、アヴォスを見上げながら問いかけた。そん
なティアの問いかけにアヴォスは、ただ……。

「いずれ分かる」

とだけ言った。そしてティアは呆れたようにこう言い返した。

「またそれですか。父上はいつもそれですね」

「あはは。まあいいじゃないか」

「そうよティア。あんまり細かい事を気にしていると、いつか頑固
パパになっちゃうわよ？」

ルシアも自分の息子が可愛いのか、アヴォスと一緒にあってティ
アをからかう。

「ティア、お前もオレと同じ年なのだ。いいかげんに父上と母上の
気持ちを分かってやれ」

「兄上……」

ティアはどうしても、アヴォスとルシアの気持ちが理解できない。
自分を愛し、守ってくれている。ただそれは分かっているのだ。し
かし本当に分らないのは、何故下等な人間の真似事を2人がする
か、という事なのだ。

ティアは人間が嫌いだ。自然を壊し、動物を殺し、自分達だけが住みやすい世界へとこの地球^{ほし}を変えてしまった。そんな人間達が、ティアは大嫌いだった。

「イブにそんな顔をするなティア」

「あなたは笑っていた方が可愛いのに、いつもムスツとして」

「お兄ちゃん笑って」

アヴオスとルシアに続いて、あまり喋らないウルまでもが口を開いた。

「ウル……」

流石のティアも、可愛い妹の頼みでは断れない。無理矢理だが、頑張って笑顔をつくってみた。何やら嬉しいのか恥ずかしいのかよく分からない表情だ。

「お前にしてはいい笑顔だな。兄として誇りに思うぞ」

ヴェルはティアと双子の兄弟なのだが、人間の双子のようにそこまで互いの顔の作りがそっくりというわけではない。これは双子であつてもティアにしか出来ない表情だ。

「さあ、予約してあるホテルに行こう」

アヴオスが目を和ませて言った。

ホテルに到着すると、ティア達は部屋を確認するため、アヴオスは受付まで行き、その他は中心にある噴水のまわりに並べられている椅子に座っていた。

「これで去年のように何事も無くイブを終えられるといいんだけどね」

「何を言っているのですか母上。この日は全世界の人々が幸せになる日なんですよ」ヴェルも人間の事は好きな方なので、このイブという日はとても大好きなのだ。それは死神だつて例外じゃない。死神と悪魔が戦争中とは言え、こんな日にわざわざ襲ってくる者はい

ないだろう。と、ルシアとヴェル、そしてアヴォスは考えている。だがティアは、そんな甘い考えの3人がとても心配だった。イブだからという理由だけで死神が襲って来ない保障などどこにもない。逆に警戒すべきだとティアは思う。気が抜ける日だからこそ、死神はその隙について襲ってくる可能性だってある。

「もつと警戒すべきだ」

そんなティアの悪い予感、多少なり違うものではあるが、すぐに現実になってしまった。

「全員中央の噴水に集まれ!!」

突然すぎた。銃声とともに太い男の声がまるでホテル全体に響くかのように波打ってティアの耳に入った。

「キヤアアアアアア!!」

続いて若い女性の悲鳴だ。ティアがその悲鳴に気づいて振り返ると、なんと1人の黒髪の男性が全身を血で覆われ、倒れこんでいた。その顔のつくりと、近くに落ちていた免許証からして、おそらく日本人だろう。免許証には「阿部優太^{あへゆうた}」と書かれていた。

「何だ? 何が起きている?」

そして次第に人々がこのロビーに集まった。その数は何と集百人にも及んだ。さらにその周りには黒い衣服を纏い、大量の銃を所持している強盗らしき男共が数十人ほど。

「強盗か……面倒ですね父上。一気に片付けますか?」

「いや待て。ここは様子を見よう」

「何を言っているのですか!? こんな人間共、早急に始末して……!」

……!」

しまった。つい声の音量が大きすぎた。

「あ? 何だガキ! 今なんつった!?!」

すると強盗の1人がティアに銃を突きつけた。

「……調子に乗るなよ……クソカス野郎が」

「んだとガキ!! そんなに死にたきゃ死ねや!!」

ティアの言葉に怒りを露わにした男は、銃口を向けるとすぐに発

砲した。それによせばいいのにも何発も。

「おい、あまり人質を殺すなよ」

「へっ、ざまあみる……へっ!？」

「そんなに死にたきゃ死ね？ こっちの台詞だな。黙って死ね」

そう言つてティアは発砲した男の頭部を蹴り飛ばした。その頭部はその先にいた仲間の強盗の背中にあたつた。

「このガキふざけやがつて!!」

ついには何人もの強盗が発砲する事態にまでなつてしまった。アヴォスとヴェルは関係のない人間に弾が当たらないように1つひとつを左右の手で掴み、動き回っている。一方ルシアも、ウルを守りながらなるべく人間に当たらないように気をつけているが、人間の方にはかり意識がいきすぎたため、誤つてウルを腕を放してしまつた。

「ウルちゃん!」

「ウル! 大丈夫か!？」

すぐさまティアがウルの元に駆け寄る。

「うぐっ!」

しかしたまたま近くにいた強盗の男に腹部を蹴られてしまい、一瞬足の動きを止めたため、ウルはその男の捕らわれてしまった。

「くっ……ウル!」

「へっ、そんなにこのガキが大事か？ いいぜ、この場で殺してやるよ」

「やめ……ろ!」

ティアは力を振り絞つてダッシュした。

「へへへ……へ?」

ティアがウルにたどり着く前に、突如現れた1人の銀髪の少年にウルを横取りされてしまった。強盗の男はその少年に両目を潰され、もがき苦しんでいた。

「うっ、うぎゃああああああ!! 俺の目がつ、目がああああああああ!!」

「誰だ！？ ウルを放せ！」

「そうか……この娘がディアヴォロスとルシアの間に生まれた子供か。今ここで殺しておいた方がよさそうだ」

「おい、何を言っている？ ウルを放せ！ 放せ！！」

銀髪の少年はティアの言葉に耳を傾けず、ただウルと見つめ合っていた。ウルは恐怖で涙がこぼれ落ちるだけで言葉出ず、ただ震えているだけだった。

「貴様には何の恨みもないが、我が死神一族のため……ラ・モール様のために……」

その少年はティアに聞こえない声でそう呟くと、ウルを心臓を握り潰した。そして顔も誰だか分からないくらいに破壊して、さらにはその死体を粉々にさせた。

「あ……あ、ああ……」

ティアは何が起ったのかしばらく理解ができなかった。

「……ではな悪魔ティアマテウス。いつか死闘を繰り広げる時が来るだろう……それは十六夜の月が闇に浮かぶ頃に……メリークリスマス」

最後にそれだけ言うと、少年は夜の街へと消えて行った。

「う、あ……うう……うわああああああああああああああああああああああ……」

家族全員が幸せな時を過ごさずだったこの日に、ティアはあまりにもあっさり、大切な実の妹ウルを失った。イブの夜に……。

第6夜「イブの夜」(後書き)

どうもです。誤字脱字があるかもしれません。その時は教えてください。
さい。

読んだあとに評価してくれるとありがたいです。

第7夜「神器の間」(前書き)

7話目を投稿します。

今回は過去篇ではないのでご安心してください。

第7夜「神器の間」

ニューヨークに到着したティアとウルは、空港を出てしばらく夜の街を歩きまわっていた。流石はニューヨークなだけあって、夜でも人通りは多かった。多くの人が生活をしているこの街のどこかに、ティアの求める三種の神器の2つ目があるはずなのだ。

「……それで、神器はどやって探すの？」

「ああ。それにはこの左眼を使う」

そう言つて、ティアは自分の青い瞳を指差した。

何故神器を探すために左眼を使うのかというと、ティアの左眼は強い魔力と共鳴する力を持っている。三種の神器は常に強い魔力を放ち続け、その近くにあるものに悪影響を与えている。つまり、その魔力と共鳴する事ができれば、神器の在り処を見つけ出す事ができるのだ。

「そうなんだ。じゃあ早く見つけてみて」

「おう……………」

そう言つて、ティアは左眼を閉じる。

「……………ああ……………駄目だな」

「駄目つて？」

「確かに強い魔力は感じられる。だが魔力を持っているのは神器だけではない。人間でも建物でも、電子機器でさえ魔力をかなり少量だが放っている。それがここでは多すぎて、神器の在り処が掴めない」

ティアは顎に手を当てて考える。死神が計算してこの場所に神器を隠したのであれば、それは時間を稼ぐためであるだろうと、ティアは考えた。

「仕方ない。地道に探していくしかないな。ニューヨークにある事は間違いないし、魔力が全く感じられないわけじゃない。多くの場所や時間帯で何度も探してみる」

「じゃあ今日の活動はおしまい？」

「ああ。また死神が襲ってくる可能性もある。昨日のように、あの空間で寝るとするか」

「思っただけどさあ……」

ティアが空間の裂け目を出現させたすぐに、ウルはティアにあることを聞いた。

「その空間からニューヨークに来る事はできなかったの？」

「無理だ」

即答。

「外からならどこであつてもこの空間に入ることができるが、空間の中からは、入った場所にしか出られないんだ」

「そうなんだ。あ、それと……前にも聞いたと思うけど、どうしてニューヨーク行きの便や時間帯が分かったの？」

ウルは思い出したようにティアに答えを求めた。

「それは明日の朝食の時にでも説明する。今日はもう寝ておけ」

ティアはまるで逃げるようにしてウルに背を向けた。

「うん……」

まあティアも疲れているはずだから仕方ないと、ウルは素直にティアの言う事を聞いた。しかし本当は、ただ説明するのが面倒なだけなのではないのかと感じていた。そんな事を思いながら、ウルはティアの後に続いて空間の裂け目の中へと、吸い込まれるようにして入って行った。

その空港の近くにあるホテルの35階の窓から、ティアやウルの姿を目撃した1人の男がいた。

「……まさか、お前がこの地に再び足を踏み入れるとはな……」

男はそれだけ言うと、窓のカーテンを閉め、ついていた部屋の電気を消した。

そして10月3日の朝。ティアとウルは、昨日と同じように2人で朝食を取っていた。今日は昨日とは違って、ティアも早起きをし、これと言って様子がおかしいことはなかった。

「それでねお兄ちゃん」

「あ？」

今の返事で、ティアがまだ寝ぼけている事が分かった。

「今日こそ話してもらうからね。どうしてニューヨーク行きの便や時間帯が分かったの？」

「……………それはな……………昔……………あ、すまない。ニューヨークに来る前、空港はあまり利用しなかったが、あれは嘘だ。本当は何度も利用していたんだ。悪かったな」

ティアはちゃんと理由を話したが、ウルにはどうしてもそれが真実だとは思えなかった。もっと他に、何か理由があるような気がしてならなかった。だが、これ以上聞くのもしつこいと思われるってしまうので、それ以上は聞かなかった。

「今日は神器の場所を見つけるためにニューヨークを飛び回るから、ウルはここで大人しくしてろ」

「神器の場所って、今日中に見つけられそう？」

「分らん」

また即答。

そう言いながらティアは味噌汁を飲み干すと、椅子にかけてあったコートを羽織り、神器を探しに行った。

ティアがここで大人しくしていると言った理由も分かる。忘れていたかも知れないが、ウルはティアの血を飲み、今は人間ではなく、悪魔なのだ。用心もしないで街を出歩けば、悪魔祓い師等エクソシストに浄化されてしまうかもしれない。

「ふう。じゃあ片付けようかな」

ウルは朝食を食べ終わると、自分の食器とティアの食器を洗った。……………掃除でもしようかな」

ただ待っているだけでは退屈だ。家では常に独りだったウルは、

家事なら何でもできるようになっていた。掃除に洗濯、先程の料理もそう。ウルは多少の事なら何でもできるのだ。しかし、この屋敷は特に酷く汚れている所もない。洗濯物が溜まっているわけでもない。

「……………」

やる事があると思ったが、さあ何をやるうかと考えると、意外にもなかったりする。汚れていないとなると掃除をする気にもならない。洗濯物がないのに態々ティアの服を汚して選択する必要もない。ある意味でこれは意味不明な行動だ。釣った魚をリリースするようなものだ。

「何しようかなあ？」

そんな事を思いながら意外と面積のある館をウロウロと歩き回っていると、見たこともない扉を見つけた。しかも不思議な事に、その扉だけが不気味にホコリに包まれていた。

「どうしてここだけ掃除してないんだろう？」

不思議に思ったウルは、その扉を開けてみる事にした。不思議と恐怖はなかった。

「……ケホッ、ケホッ。すごいホコリ……」

扉を開けると、中には光がなく、大量のホコリと砂だけがあるようだ。徐々にウルが目が暗さに慣れてくると、とんでもない物が見えてきた。

「何これ？ 嘘でしょ……？」

はつきりと目で確かめようと、扉の内側についていたライトで回りを照らしてみると、そこにはハッキリと、神話に出てきそうな武器や道具などが大量にホコリを被った状態で保管されていた。

そしてそこには、最近手に入れたばかりの八咫鏡やたのかがみまでもがあった。しかし八咫鏡は最近入れられたばかりのせい、大してホコリは被っていないようだ。

「べ、別に悪くはないよね。だ、だって手に入れた物をここに入れているだけだから。悪い事に使っているわけじゃないもんね」

そうは言ったものの、やはり大事な物である神器をこんなホコリだらけの場所に保管してあるのか気になったウルの足は、無意識のうちに前へと歩みを始めた。

「……そこで何をしている？」

突然背後から聞き覚えのある声がウルの耳に入った。

「きゃ！ お、お兄ちゃん！？ もう、戻ったんだ」

振り向いてみると、ティアが扉にもたれかかり、腕を組みながらウルを睨んでいた。

「空間の中に異変を感じて戻ってみれば……こういう事か」

ティアはまるで、弱い小動物を睨んでいるかのようにウルを見つめ続けた。ウルもそんなティアの顔を見るのが怖かった。

「お、お兄ちゃん。どうしてこんな所に神器を？」

「ここで何をしているのかと聞いている！」

ティアは自分の質問に答えないウルに腹が立っているようだ。鋭い目つきでウルを睨み続ける。

「ご、ごめんなさい。悪気はなかったの。ただ、ちょっと気になっただけで……本当にごめんなさい！」

ウルは半分涙目になりながら頭を下げてティアに謝罪した。

「……プ、ププ……」

「え？」

「アハハハハハハハ！！」

ついさっきまで怒っていたかとおもえば、今度は突然口を大きく開けて（腕は組んだまま）笑い始めた。

「アハハ……悪いなウル。さっきまでは演技だ。本気で怒ってるわけじゃない。ウルがあまりにも可愛いからちよつとからかっただけだ」

「そ、そうなんだ。じゃあ空間に異変を感じたっていうのは？」

「それも嘘だ。ホントはただウルが恋しくて戻ってきただけだ」

そしてティアはまたウルに背を向ける。

「それにしても面白いくらいに怖がったなあ。これだけ怖がってく

れると、脅した方も気分がいい」

ティアは笑いながらウルの前から姿を消した。

(……………嘘……………だよな?)

ウルのは激しく震えていた。それは今言ったティアの言葉が嘘だということがすぐに分かってしまったからだ。それに……………。

(だってお兄ちゃん……………目が全然笑ってなかった……………。
……………んだもん……………)

そう思うと、ウルは自分がこの部屋に入っではいけないのだと確信した。それでティアはなるべく優しく言おうと、あんな事をしたのかもしれない。ウルを2度とこの部屋に入れさせない為に……………。

ウルは急ぎこの部屋から飛び出し、自分の部屋に飛び込んだ。

第7夜「神器の間」（後書き）

誤字脱字がある場合はお教えください。

次回はついに三種の神器2つ目の在り処が明かされます。

第8夜「竜の招き」(前書き)

今回は新キャラが登場します。

第8夜「竜の招き」

10月10日。ニューヨークに来て早くも1週間ほど時間が経った。あれから神器を保管してある間の扉は、鎖や鉄格子で頑丈にされていた。鎖には鍵穴がいくつもあるようだが、どれも全くもって異なった形をしている。もしかしたら、1つが本物で、他はダミーかもしれない。

まあそんな事はさておき、そろそろ館の中だけで生活するのは悪魔であるウルでも苦しくなってきたのではないかと思い、ティアはウルにいつでも館と外を行ききできるように、空間の裂け目を開く方法を教えた。ティアの血が身体に流れているせいか、意外にもあっさり、マスターする事が出来たため、ウルは小さい子供のように飛び跳ねて喜んだ。

そんなわけで、今日はニューヨークの街を歩いてみる事にしたウルは、ティアが出かけてるとすぐに、ニューヨークの街へと飛び出して行った。

「うん。どこ行こうか迷っちゃうなあ」

見慣れぬ街に気分は不安と期待で最高だ。スキップしながら前に進み続けると、意外な者を見つけた。

ウルが目を付けたのは、黒いコートを着た男だった。

「The strawberry of this cake is smaller than others!」

訳：このケーキのイチゴが他より小さいぞ！

「Did this cake form it properly?」

訳：このケーキは適当に作ってただろ！？

「I looked properly! The excuse is not possible!」

訳：ちゃんと見てたからな！ 言い訳はできねえぞ！

太陽が眩しい昼間の街で、1人の男がケーキ屋の40代前半くらいの男に大声で何やら文句を言っている。

すると店の男がこんな事を言った。

「I call the police by business interference」

訳：営業妨害で警察を呼びます。

「I'm sorry. I was bad」

訳：ごめんなさい。オレが悪かったです。

警察という言葉に反応したのか、文句を言っていた男は素直に頭を下げて、土下座もして、営業妨害した事を謝った。ちなみにこのニューヨークでは、『土下座』という文化はない。

「お兄ちゃん、神器を探してるんじゃないかって、ケーキ屋を探してたの？ そんな事ないよね」

あの光景を見てしまったので、ティアはいつも神器ではなく、ケーキ屋を探しに言っているような気がしてしまった。

「お兄ちゃんのキャラが未だに掴めない……」

そんな事を口から漏らして、声を掛けるのは恥ずかしいからやめる事にした。そのままウルはその場を駆け足で離れて行った。

「チツ……何故悪魔であるこのオレが、こんな人間風情に頭を下げなければならぬ？」

「それはあんたが馬鹿だからでしょ？」

「あ？」

人間風情が悪魔であるオレに向かって何という口の聞き方をするか。そう思ったティアは、すぐ後ろから聞こえてきた声の主の姿を確認するべく、チラツと頭を後ろに回した。

「ガキ……ただのガキではないいな。何者だ？」

ティアが人間ではないと確信した理由はただ1つ。後ろにいたのは15歳くらいの少女で、普通ではあるはずのない赤い尻尾と羽があったからだ。髪は燃えるように赤い髪色をしており、瞳は、一見紫のようだが、見る方向によっては、赤や青にも見える。

「あたいか？　あたいは竜雅^{りゅうが}。悠^{はるか}。ま、よろしくな」

「名前など聞いていない。何者かと聞いている」

「ええと、種族は一応竜種^{りゅうしゅ}だけど……。あ、別にでっかい竜になつたりするわけじゃないから」

実に明るく話す悠に、ティアは段々ライラしてきたのか、目つきが鋭くなった。

「で、そんな竜がオレに何の用だ？　まさか『斃^はしに来た』とでも言うんじゃないだろうな？」

「別に、あんたの正体は見当がついてるからね。喧嘩^{けんか}なんて売らないよ」

「ほお……では16行前の言葉はどういう意味だ？」

ティアは眉毛をびくびくさせながら言った。

「あ……あ、あれは別に……。ど、どうでもいいじゃんそんな事！」

うつかりしてたのか、自分が言ってしまった言葉を悔やんでいる。事の重大さに気付くのが遅すぎた。

「……まあいい。それで結局オレに何の用だ？」

ティアは広い心で悠を許した。

「おかしいんだよな。あんたらの一族は滅んだはずなのに。まあ、あたいは別に深入りしようというわけじゃないけど」

悠は右手で腰をさすりながらティアには目を合わせずに言った。多少なり常識は持っているようだ。

「確かに滅んだ。オレを残したすべてがな」

ティアは悲しい目でそれを言った。なるべく思い出さたくないが、忘れることもできない嫌な思い^{きおく}が出だ。

「あたい、暇だし、できればあんたと一緒にいたいんだけどいいか？」

「何のつもりだ？」

「あんたが三種の神器を探している事は、竜種^{あたいら}の間でも結構知れ渡ってるんだよ。特にすることも戦争する相手もないしな」

「信用できないな」

「してもらうさ。あたいは死神とは何の関係も持つじゃない。あくまで中立、みたいなもんだ。いいだろ？　一緒に探せば、それだけ早く見つかるんだ」

「お前さつき、『生き残りはいないと思ってた』とか言ってたなかつたか？　なのに何で竜種の間でオレが三種の神器を探してることが知れ渡ってんだよ？」

「え。さ、さあ……言葉の……あや？」

「やっぱりお前みたいなバカとつるむ気になれんな。大人しく群れの中に帰れ」

悠と話していると何の話をしていたのか分からなくなってくる。そして悠の真の目的が分からない。本当にただの気まぐれで、ここでティアと会ったことが偶然だとしたら、使えるような気はする。ティアはしばらく悠の目を見ながら考えた。

「お前と話していると疲れる。が、まあしばらくの間なら……」

「やっただええええ!!」

ティアが最後まで言う前に、悠は大声を出して飛び上がり、そのまま嬉しさのあまりティアに抱きついた。

「ありがとう！　ありがとう！」

「分かったから放せ！ 尻尾が足に当たって痛いんだよ！」

「あ、悪い」

とんでもないものを仲間にしてしまったかもしれない。

「だが勘違いするな。少しでも不自然な行動を取れば、その瞬間、お前に死が訪れる」

「了解」

悠はペロツと舌を出して返事をした。

「つまりはどういう事？」

「つまり、オレはこいつと組んで、三種の神器を探すという事だ」

館に戻ったティアは、悠を連れてウルの前に現れた。そして夕飯を食べているこの時に、悠について説明をしているのだ。

「それで本当に神器は見つかるの？」

「さあな」

「実はもう神器は見つけちゃったんだよね」

意外な一言を悠は簡単に言った。ティアが1週間かけても見つけられなかった物を、悠はすでに見つけているというのだ。ティアは思わず、ティアの前に座って、ウルの子隣に座っている悠に近づくため、前かがみになった。

「何故だ！ オレが全身全霊をかけても見つけられなかった物を！」

「それについては明日説明するから。今日はもう眠い…… おやすみ

……」

そう言って夕食を食べるだけ食べると、相当疲れていたのか、寝てしまった。

「あ…… ったく、何なんだよ」

「それにしても、この子竜なんでしょ？ 意外に人間とほとんど同じなのね」

「竜って言っても、そこまで人と違う所はない。むしろ、巨大な竜に大変身って方がおかしいくらいだ」

ティアは机に両肘を乗せて、ウルに竜について語っていると、何を思ったのかチラッと悠の寝顔を見た。

「起きている時はあれだけうるさいのに、寝てると静かなもんだ。身長が低いから余計に可愛く見える」

そう言いながら、ティアは悠の頭を軽く撫でた。それを見ていたウルが嫉妬心を抱いたのか、自分の頭をティアに近づけた。

「…… お兄ちゃん。お兄ちゃんは私のお兄ちゃんだからね」

「分かってる。オレも妹はウル（……）だけだ」

ウル of 気持ちを理解したのか、ティアは優しくウル of 頭を撫でた。（そうだ…… オレ of 妹はウル（……）ただ1人。他の誰でもない）ティアはウル of 頭をそのまま10分ほど撫で続けていた。しばらく

くして、ウルが眠ってしまつと、ティアはウルと悠の2人をウルの部屋に寝かせると、自分も眠くなったのか、部屋に入り灯りを消した。

第8夜「竜の招き」(後書き)

次回はいよいよ三種の神器2つ目の登場です。

第9夜「心臓を食らう者」(前書き)

今回は三種の神器の2つめが出ます。
ティアや悠の戦闘シーンもあります。敵は一体どんな幻獣なのか。
ようか。

第9夜「心臓を食らう者」

竜雅悠を仲間に加えたティアは、悠が三種の神器の在り処をつきとめているという事で、悠に案内されて夜のニューヨークを飛び回ること20分ほど。

「てゆうーか、あんたって飛べたんだ」

「当然だ。オレにはこの漆黒の羽根がある。黒光りしていて美しいだろ？」

ティアはそう言うと、コウモリのような羽根を悠の横に移動し、自慢した。

「そろそろ到着だ」

「聞いたってシカトかよ」

機嫌を悪くしたティアだったが、とある建物が目に入ると、表情は一変してキリッとした表情に変わった。

「あれは……『セント・ジョン・デイベイン大聖堂』……だな」

100年以上の歳月をかけてなお未完成。1万人を収容できる世界最大のゴシック様式の大聖堂である。現在3分の2の工程を終え、塔の建造に着手したという。内部は壮麗なステンドグラスが随所にちりばめられている。

「そ。あの中に、神器はあるはずだ」

「まさに神器を飾るのに相応しい場所だ」

大聖堂の回りをしばらく人間がいないことや、変わった魔力が感じられないかを確信すると、2人は静かに降り立った。

「つか、お前それでよく人間に怪しまれなかったな」

「……ああ、あたいの尻尾と羽根は、人間には見えないはず……だ」
ちよつと自信がないのか、最後の方は声が小さくなった。

「よし、入るぞ」

「ああ」

2人は回りを警戒しながら大聖堂の中へと入って行った。

「かなり強大な魔力を感じる……………」

「あれだ！やさかにのまがたま八尺瓊勾玉があそこに！」

悠が叫んで指を向けた方向には、神器と思われる勾玉が月の光に照らされて、ひとつ美しく輝いていた。その輝きは、一筋の光ではあるが、その光にひとたび当たれば、全身で勾玉の魔力を感じる事ができるくらい強烈だ。

「取るぜ」

「待て」

勾玉を手で掴もうとした悠をティアが止めた。

「日本で八咫鏡やたのかがみが祀られていた社には幻獣が封印されていた。恐らくここにも。そして、次の神器の在り処を示す謎々もな」

「あ、これじゃねえ。なんか紙に書いてあるけど」

勾玉が飾られている下に花で覆われた台がある。その花の中に小さく折られたA4のコピー用紙が発見された。

「どれどれ……………」

ティアが用紙を見てみると、そこにはこれだけの事が書かれていた。

ケイ素・プラセオジウム・エルビウム・鉄・カルシウム・水素・ニッケル・レニウムを選べ、そして並べろ。

「……………また訳の分からない謎々だな」

「あたい……………こんな謎々解けないぜええ！」

意味不明な謎々に、悠は暴れ出した。

「落ちつけ！ オレが解くから少し待ってる！」

そう言つて、ティアは顎に手を当てて考え始めた。

「はて……………どういう意味だ……………」

ただ時間は待つていてはくれず過ぎていくだけ。悠も一応は解こうと思い、謎々が書かれている用紙をティアと顔を並べて見つめ続ける。だが、どれだけ頭を回転させても自分にはこの謎々は解けな

いと諦めたのか、途中から見つめるのをやめた。そして飾られてあった勾玉を服のポケットにしまい、大聖堂の中をウロウロと歩き始めた。

そんな事は気にせず、ティアはただ考え続ける。
そして時は過ぎる。

「……………」

ティアが謎々を解き始めてからすでに10分ほどになる。その時だった。突然地面が揺れるようになり、大聖堂の下から床を突き破って幻獣らしき怪物が姿を露わした。

「チッ、ご登場はまだ少し先のはずだが？」

「シャアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

夜の街に、幻獣の鳴き声が響き渡る。

「ほお……アミメットではないか」

エジプトの死者の書に描かれた怪物。死後の裁きを受けた悪人の心臓を餌とする。ライオンの身体と前脚、鰐の頭、河馬の後脚をもっている。

エジプトでは人間が死ぬと、オシリス神の法廷に出廷して裁きを受けるとされる。死者の心臓は抜き出されて天秤の皿に置かれ、死者が行った証言が真実かどうか判定される。

天秤が傾くと、その心臓は側に控えているアミメットに与えられる。アミメットはこれを大口で喰らう。心臓を喰われた死者は、もう二度と復活することができないと言われている。

「アミメットが封印されていたのなら、スフィングスの謎かけを出してほしかったものだ」

ティアはすぐにバルムンクを構えた。悠もまた、後ろで自分の武器を手持った。

「お前……それは？」

「ロケットランチャーだけど？」

「普通に言っただけじゃねえよ。まさかそれをここでぶっ放す気じゃあ……………」

「その……まさかだ！ どつかああああああん！！」

いくら大聖堂が広いと言っても、こんな所でロケットランチャーなど放てば、大聖堂は崩壊する。そんなことはティアには分かっていた。だから恐れた。そして恐れた事が現実になった。

予想すぎるくらい予想通りに、大聖堂は悠のロケットランチャーにより、ものすごい騒音を街に響かせながら半分ほど崩壊してしまった。しかもティアはその瓦礫の山に頭隠して尻隠さずの状態となっている。

「流石あたい！ 相変わらず破壊力サイコー！」

「うーん！ うーん！ ぶはあっ！」

瓦礫に埋もれていたティアが飛び出した。

「何するんだテメエ！！ オレまで一緒に殺す気か！？」

ティアは瓦礫の山から飛び出すと瞬間移動のように早いスピードで悠に近づき、怖い顔で怒鳴りつけた。

「そんな事より、奴がこれくらいで死ぬとは思えないぜ」

「またシカト……だがその通りだ。まだ奴の魔力は感じられる……来る！！」

ティアの声と同時に、アミメットが瓦礫の下からティア以上の勢いで飛び出した。

「I will enjoy……（楽しもうぜ……）」

「おらおらおら！ どかねえとあたいの破壊の杖が火を噴くぜ！！」
「あ？」

ティアがかつこよく決めているにもかかわらず、悠は再びロケットランチャーを解き放った。

「ぎゃああああああ！！」

ティアなどお構いなしにロケットランチャーを使い、暴れまわるところがアミメットの姿がない事に、ティアは気が付いた。

「悠！ 後ろだ！」

「楽しいぜ！ こんなに暴れる事ができるなんて！」

ティアの声が爆発音によってかき消されている為、悠の耳にティ

アの言葉は届かない。

「……………って、あれ？」

悠がアミメットの気配に気がつき、振り向いたときにはすぐ目の前まで迫っていた。

（クソッ！ 間にあわねえ！）

走って悠の元へ向かうが、間にあわないだろうと判断したティアは、右手でしっかりと掴んでいたバルムンクをブーメランのように投げた。柄（剣を持つ為）の部分が瓦礫に当たり、その反動でバルムンクは跳ね返り、アミメットのワニのような口を斬り落とした。アミメットは悠に噛みつく直前で口を半分切り落とされた為、後ろに転倒し、その痛みでもがき苦しんでいる。

「大丈夫か悠！？ 油断するんじゃないやねえよバカ！」

本気で心配したのか、ティアはすぐに悠の容態を確認する。

「うう……………ごめんなさい」

悠も調子に乗って後ろを取られた事を反省している。

「謝るなら後だ。今はアミメットに集中しろ」

「うん……………」

相手はあのアミメット。油断していればすぐに心臓を食われてしまう。次は今のようには助けられる自信はないと悠に宣言すると、ティアは地面に突き刺さったバルムンクを手に取り、再び身体を少し斜めにしながらアミメットに向かって足を素早く動かした。

「ハアア！」

ティアは大きく剣を振り下ろす。

「シャアア！」

しかしアミメットも簡単にはやられてくれない。大きく後方に飛び上がったアミメットに逃げ場はなかった。

「やれ、悠」

ティアは呟くようにそう言った。

「OK……………どつかああああああん！！」

着地する寸前のところで、悠のロケットランチャーが火を噴いた。

もうこの状態からは逃げることはできない。見事にそれは命中し、アミメットは身体中から血を流し、倒れこんだ。

「じゃあぁ………」

ケルベロスと同様に甘えるような声を出し、しばらくの間ティアたちを見つめていたが、最後には力尽きてしまった。

第9夜「心臓を食らう者」(後書き)

ここまで読んでくださった皆様に、あらためてお礼を申し上げます。
この「悪魔の妹ウル」を読んでくださり、ありがとうございます。

第10夜「死神の存在」(前書き)

謎々の答えが明かされます。
2人目の死神が登場します。

第10夜「死神の存在」

「ふう……案外弱かったね」

アミメットの戦闘を終えた悠は、力が抜けたようで、その場に座り込んだ。

「……………」

その少し前で、ティアがもう息をしていないアミメットを黙って見つめている。そしてゆっくりと足を動かし始めると、アミメットの側まで移動した。

「何やってんだ？」

ティアの奇妙な行動に、悠は疑問を抱く。

「……悪いな。お前に恨みはないが……その魔力、頂くぞ……」

そう言つと、ティアはアミメットを優しく抱きかかえるようにして、アミメットのその大きな身体に身を寄せる。アミメットの身体とティアの身体が、まるで共鳴しているかのごとく、美しい青色の光に包まれた。

「何だこれ……すげえきれいだ」

そしてしばらくすると、青い光は消え、アミメットの死骸もその青い光とともに消えてしまった。

「おい、何をしたんだ？」

「アミメットの魔力を頂いた。それだけだ……」

何か上の空のような表情で、ティアはニューヨークの夜空を眺めていた。

「……あ、そうだ！それで謎々はどうなった!？」

悠は思い出したように言った。

「ああ。解けた」

「えっ、解けたの?! あんなものを!」

悠は相当驚いた様子だ。

「ああ。簡単なものだった。そもそも考える必要などなかったのだ」

「それで、答えは!？」

「こういう謎々は、とりあえず、これを元素記号に書き直してみる」
元素記号に書き直すと以下のようになる。

ケイ素 $\parallel$ Si $\cdot$ プラセオジウム $\parallel$ Pr $\cdot$ エルビウム $\parallel$ Er $\cdot$ 鉄 $\parallel$ Fe $\cdot$ カルシウム $\parallel$ Ca $\cdot$ 水素 $\parallel$ H $\cdot$ ニッケル $\parallel$ Ni $\cdot$ レニウム $\parallel$ Re

「それで？」

「それからこの元素記号を並べ替える。このなかの1つくらいはダミーがあるかもしれないから気をつける……」

ティアが並べ替えたものがこちらだ。

F $\cdot$ R $\cdot$ E $\cdot$ N $\cdot$ C $\cdot$ H $\cdot$ P $\cdot$ A $\cdot$ R $\cdot$ I $\cdot$ S

「つまりこれは、『French Paris』となる」

「ということは一！」

悠はハッと閃いた。

「そう。次の目的地は……フランスの都パリということだ」

「なるほど！ あ、でも他の可能性はないのか？ 本当にフランスだけ？ もっと考えた方が……」

「間違いない。最後の神器がある場所はフランスの都パリだ」

「どうしてそこまで言い切れるんだ？」

「何故なら、日本はオレの生まれた場所。ニューヨークはオレの妹が死んだ場所」

「妹ならいるじゃん？」

ティアの言っている事がよく分からないで首を傾けているが、ティアはお構いなしに話を続ける。

「そしてパリは……」

「ティア様のお父様がお亡くなりになった場所……でしょ？」

「ああ、そっだ」

突然の声に、ティアは驚く様子はない。まるでさっきまでずっと一緒にいる者と話しているような感じで答える。

一方悠は、突然の声に戸惑っている。

「さっきからコソコソと気の陰に隠れてオレたちの観察か、死神様？」

「流石はティア様！ あちきの存在に気づいていらっしやっただけですわね！」

ゆつくりと木の陰から姿を現したのは、悠と同じ年くらいの死神だった。ピンク色のドレスを着て、黄色のスカーフを首に巻いている。髪の色は赤色で、目の色は橙色をしている。

「それで、オレに何の用だ？ どうして親父の事を知っている？」

「質問は1つまでですよ？ そうですねえ、お父様の事を私が知っているのは、零時様に教えてもらったからですよ」

「零時？」

「あれ？ お会いになっていませんでしたか？ 確か日本であなたに会ったと仰っていましたが……」

その時、ティアの脳内に日本にいたときのある記憶と男の姿が蘇る。

『貴様が三種の神器を簡単には手に入れられないように、ラ・モール様は世界各地にばら撒き、1つ1つに次の神器の場所を示す謎々を用意した。三種の神器をすべて手に入れ、力を我がものとし、いつかラ・モール様の元へ行くんだな』

「——なるほど。あの時の銀髪の男か」

「十六夜零時。ラ・モール様の次に恐ろしいと言われるお方。あち

きはその零時様の部下の1人でございます」

丁寧テイネに少女は頭を下げる。

「1人、という事は他にも何人かいるのか？」

「はい。もう1人、あちきと同じく、零時様セイジに選ばれし死神がいます。まあ、実力はあちきの方が上ですけど」

「そうか……じゃあ死ね」

ティアは少女に戦闘体勢に入る暇を与えず、バルムンクで攻撃を仕掛けた。

「おっと！ 気が早いですよティア様。まだ名乗っていませんよ？」

「ならさつさと名乗れ。悠、ウルが心配だ。ウルの元もとにいてやれ」

「お、おお」

そう言つて、ティアは空間の裂け目を出現させ、悠を館まで送つた。悠も、この場所においても意味はなさそうだと分かったのか、自ら抵抗することなくティアの指示に従った。

「ほう、あれは竜種ですか？ 女の子を守るなんて、可愛いところあるじゃないですか」

「さつさと名乗れクズ野郎」

「分かつてますよ。あちきあきつきの名前は秋月紅葉あきつきもみじ。あなたを消し去る為にやつてまいりました」

「なら話は早いな。始めよう…… I will enjoy……（楽しもうぜ……）」

「そうですね」

紅葉と名乗る死神の少女は、右手に赤く炎を纏った倭刀を出現させた。

「それは、『炎龍刀』……だな？」

「よくご存じで」

炎龍刀は、1000年ほど前に、中国の若者が伝説の刀鍛冶が作り上げた名刀を使って火の神に挑んだところ、圧倒的な力の前になす術がなく、斃はす事を諦め、己の刀に火の神の力を封じた倭刀。

「……ハアアッ！」

ティアは一気にたたみかけるようにバルムンクを構え、飛びかかった。その衝撃で、地面の土が回りに飛び散った。

「よっ！」

しかしフワリと横に避け、ティアの攻撃をかわした。

「まだだ」

振り下ろしたあとは、自分の左側に紅葉がいる事を瞬時に把握し、バルムンクを持ったまま身体の向きを左にして、再び横から斬りに掛った。

「甘いですよ！」

しかし紅葉は炎龍刀で素早くガードをした。剣と刀が擦れ合う音が2人の耳に入り、さらに殺戮衝動を悪化させる。

「はっ！」

今度は紅葉の反撃だ。紅葉は武器を持っていない左手でティアの胸を触り、衝撃波を繰り出した。

「グッ！」

その衝撃に耐えきれず、ティアは瓦礫の山に吹き飛んだ。

「終わりです！」

そしてすぐに紅葉は攻撃第2段に入る。高々と飛び上がり、空中で1回転をすると、ティアの心臓に向けて炎龍刀の先を突き出した。

「フン！」

しかしティアも負けてはいられず、勢いをつけて瓦礫の中を右にゴロゴロと転がりながら、何度も突き刺そうとする紅葉の攻撃を避け続けている。

そして、その戦いは間もなく終わりを告げる。

「I heard a big sound from the other side！」

訳：向こうから大きな音がしたぞ！

森の奥から人の声が聞こえた。

「……どうやら、ここまでみたいですな」

「そうだな。いくら深夜とはいえ、これだけ暴れたんだ。人が来な

いはずがない」

「続きはパリでしましょう。待っていますよ」

「その時は遺書でも書いて待つてろ」

「はい……あ、それと、あなたは零時様に2度お会いしているはずですから。」

では、おやすみなさい」

そう言つて、2人は人が来る前にその場から姿を消した。そこに残ったのは激しい戦闘によって崩壊した、セント・ジョン・ディバイン大聖堂だけだった。

（2度……どういうことだ？ はったりか？）

ティアの脳内には最後の紅葉の言葉がガラスの刃面のように突き刺さっていた。

第10夜「死神の存在」(後書き)

次回はついにフランスに旅立ちます。

オリキャラまだ募集しています。お待ちしております。

あと、文章・ストーリー評価をしていない方はすぐにしてください。

第11夜「刺客の訪問」(前書き)

次回に続いて今回もティアの戦闘がメインです。
そしてその戦闘後、新たな仲間が加わります。
ティアの回りも、なんだか賑やかになってきました。

第11夜「刺客の訪問」

2011年10月12日。東京都渋谷区。

「……ラ・モール様、ティアマテウスは2つ目の神器を手に入れ、パリへ向かうようです。先程、秋月から連絡がありました」

紺色のジーンズに白色のTシャツの上に緑色のフード付きジャケットを着ている銀髪の男、十六夜零時が暗闇から姿を現す。

「そうか。いよいよか……」

零時の言葉に応える赤黒い鎧をその身に纏い、その胸と膝の部分には、ギョロギョロ辺りを見回す血のように不気味な赤色をした目玉がついている。そう、死神たちの長、ラ・モール・ファントムだ。「はい。しかしまだ奴の力はラ・モール様と対等に戦えるほどのものではありません。もうしばらく……」

零時は話を続ける。

「むう、早く奴と会ってみたいものじゃ。この10年でどれほど成長したか……」

ラ・モールは残念そうに顔を下に向ける。

「奴の今の実力を測る為に、ある刺客をニューヨークへ送りました。秋月では奴を殺しかねないので」

「すぐに秋月にパリで待機するようにと指示を入れる。そしてその刺客に、くれぐれも殺さぬようにと……」

「御意」

零時は煙のように、夜の街へと姿を消した。

一方ティアアたちは、パリに行く支度を整え、空港で時間が来るのを待っていた。

「……………ふああ……………」

椅子に座って、欠伸をしているティアの元へ、1人の男が近寄って来た。ティアはそれに気付き、チラッと男を見る。男は高校生くらいで、こちらに声をかける様子もなく、様子を見ているようにティアたちの周りをうろついている。

「悠、ウルを頼む」

「了解」

悠もすでに男の存在には気付いていた。ただ、ティアの指示がなく、勝手に行動してはいけないと判断したのだ。

「ウルちゃん、こっちへ」

「え、どこに？」

ウルは訳が分からないまま、悠に連れられこの場を離れていく。

「話を聞こうか。オレに何の用だ？ まさか代行者とか言うんじゃないだろうな？」

「……俺はお前を殺しに来ただけだ。名は皇^{すめらぎ} 風牙^{ふうが}」

風牙は黒や赤を基調とした私服を着ている。そして闇色の刀身を持つ少し大きめの刀を構えた。

「ティア……ティアマテウスだ。さつさと来いよ……」

ティアもバルムンクを構え、両者ともに戦闘準備はOK。まわりには沢山の人々がいるにも関わらず、2人はお互いの相手の目だけを見ている。

「ハアア！」

先に攻撃を仕掛けたのはティアの方だ。ティアは瞬時に風牙の目の前まで移動した。風牙の前に現れた時にはすでにバルムンクを振り上げており、いつでも振り下ろせる体勢になっていた。

「死ね」

「馬鹿め……」

風牙の動揺しない表情に疑問を持ちながらも、構わずティアはバルムンクを振り下ろそうとしたのだが……。

「何！？ 腕が凍っている！？」

気が付いたときにはすでに時は遅かった。ティアの両足と振り上

げている右手は、突然の氷の出現によって身動きが取れない状態となっていた。

「死ぬのはお前だ」

「クッ！」

続けて魔力の弾をティアの目の前で出現させ、風牙は一步離れてそれをティアにぶつけた。それも1つだけではなく、いくつも。

「きゃあああああああ！！」

突然の爆発に周囲はパニック状態となっている。しかし風牙の耳にはそんな悲鳴は聞こえないし、光景も見えない。

吹き飛ばされたティアは、白い壁に激突し、壁をへこました。へこんだ壁の下で、ティアは尻もちをついたが、すぐに立ち上がる。「フッ……やるじゃねえか」

服に付着したホコリをはらい、高速で風牙の元へ舞い戻った。

そのとき風牙は再び足を凍らせて身動きが取れないようにしようとするが、ティアのスピードが先程よりも早くなっているため、凍らせる前にティアがその場から移動してしまう。仕方なく別の攻撃に変えた。炎を腕に纏い、火の玉のそこから銃のように炎を発射させ、ティアを狙う。しかしこれはバルムンクにより消滅させられ、やはりティアの動きは止まらない。

だが、ティアもこのままでは近づくことができない為、隙がないかと風牙の魔術攻撃を避けながら必死に目を光らせている。そして仕方なく威力は多少強いが、なるべく弱め死なない程度に技を出すという考えにたどり着いた。

（奴は強い。この程度の攻撃で死なないことを祈るか……）

ティアは動きを止めた。

（動きが止まった？ 何をする気だ？）

ティアが急に動きを止めた為、不審に思った風牙は、一旦攻撃をやめた。が、すぐに再開する。

「食らえ」

風牙は両手に力を集中させた。すると次第に氷の粒が先の尖った

状態となつて風牙の手の周りに集まり始めた。

「アイス・ストーム」

「青龍光牙偃月」
せいりゅうこうがえんげつ

2人は同時の攻撃を放った。風牙の攻撃は猛吹雪のように荒々しく鋭い氷の塊がティアに向かって突き進む。ティアの攻撃は、バルムンクに魔力を溜め、青い光が三日月のような形となり風牙を斬り刻もうとする。

両者とも譲る気は全くないらしく、さらに力を高めていく。この状態で爆発など起こしたら、空港の一部が崩壊してもおかしくないほどの力が集まっている。

「こんなもんかよ！ テメエの力は！？」

「くっ……（予想以上の威力だ）」

多少ティアの方が押し始めた。

「テメエがどういう理由でオレを狙うか知らねえ。だが、オレは子供^ガの遊びに付き合つてる暇は……ねえんだよ！！」

ついに風牙がティアの圧倒的な力の前に押し負けてしまった。ティアの攻撃が相当な威力であつた為に、空港の一部が崩壊してしまった。それでも、風牙とその武器が魔力を吸収した為、風牙は重傷を負わずにすみ、空港も多少の崩壊で済んだのだ。

「思い出した……『魔皇刀』だな？ 半人半魔の分際で、良い武器を持つているな」

「……ぐう……し、知つて、いたのか？ お、俺が、半人半魔だという事を」

風牙は血が流れ出ている腹部を押えながら、ティアに尋ねる。後頭部を含め、手足からも血が流れ出ている為、その分魔力の流出も激しい。

「当然だ。魔力を感じればそいつが何者が分かる。それに、そこまです血を流出させてたら尚更な」

「………お、俺は赤ん坊の頃、親に捨てられた。だから、親の顔を知らない。半人半魔であるため、幼い頃から『出来損ない』とし

て悪魔から蔑まされ、追われてきた。小学校に入るまで悪魔から逃げてばかりの日々だったが、やがて逃げる事に疲れ、逆に全ての悪魔を殺そうと思うようになった」

「……そうか……」

ティアは黙って足を動かし始め、風牙の元まで近寄る。そして風牙の右肩に触れると、ティアの左手が青い光に包まれた。

「あ……な、何をした？」

「魔力を分け与えた。すぐに傷は塞がるだろう」

「何故、俺にそんな事をする？　俺はお前をただ悪魔が憎いだけで殺そうとしたんだぞ？」

「テメエの心情は何となく分かるんだよ。オレも人間が憎いからな」
ティアは優しく風牙に微笑んだ。

（こいつ……）

「これは独り言だが、オレは死神のラ・モールという男に父親を殺され、今はその復讐をする為に力を蓄えている。この後、別の空港に行ってパリへ旅立つつもりだ」

ティアは風牙に背を向け、傷が完全に治るまでの間、自分の過去や今からしようとする事などを丁寧にゆつくりと、そして静かに語った。そんなティアの心が、風牙の悪魔に対する憎しみを少しだけ和らげた。だがまだ完全に消えたわけじゃない。いつか再び憎悪が蘇ってくることもあるかもしれない。そう思うと、風牙の心には恐怖という感情が芽生えてきた。

「そんな、事が……。復讐、俺と似ているな」

「無理に理解しろとは言わん。じゃあな、オレはパリに行かねばならんのでは」

ティアは語り終えると、風牙に手を振った。

「……待て」

「あ？」

「お、俺も連れて行け。お前に興味がわいた。お前の復讐劇をこの目でしっかり見たくなった」

風牙の足はまだふらついている。

「なら黙ってついて来い。足手まといになるようなら消えてもらっ
「ああ」

こうして、風牙はティアと共に行動する事に決めた。

第11夜「刺客の訪問」（後書き）

オリキャラについてはまだ募集しています。詳しくは登場人物の最後の方を見てください。

読み終わったあとは、今回のポイントを評価してください。

第12夜「人間と悪魔」(前書き)

今回は過去篇第2です。

前はティアの過去を書きましたが、今回はその父、アヴォスの過去です。

何故アヴォスが人間を好きになったか、その理由が分かります。

第12夜「人間と悪魔」

1980年8月31日。真つ昼間のこの時間帯に、イギリスのロンドンに1人の男が迷い込んだ。

その男の名を同じ種族の者はディアヴォロス様（通称アヴオス）、またはアヴオス様と呼んでいた。このアヴオスと言う男は、後のディアの父親で、この時代はまだ悪魔界があつた頃の話だ。

その昔、悪魔界は何千という悪魔の魔力で作りだしている空間に帝都を築いていた。それは死神も同じだった。当時は死神の数は悪魔とそう大差はなかったのだが、アヴオスが死んだ2001年12月31日以降、急激に悪魔の数が減少した。そして2011年の現在ではもう1人見つけるだけで生涯探しても見つからないほど。

その点、死神は違った。2011年の死神の数は数十人。こちらもかなりの数が減つたとはいえ、子孫を残して行くには充分な数と言えるだろう。

「ッ……結構暑いな……」

その格好は、黒色のライダースーツに、黒色のロングコートと言うこの時期に相応しくない服装であつた。そのため、行きゆく人々は、皆アヴオスに注目している。そして最も注目すべきは、背中にしているバルムンクだ。

「生臭エ」

アヴオスは物心ついたときから人間界に興味があつた。そして20歳になった今年（今日が誕生日）、初めて人間界に降り立ったのだ。

「ワンワンワン！」

突如犬が吠えた。

「こ、こら駄目よ！」

それは1人の女性が連れていたマンチエスター・テリアという種類の犬だ。

マンチエスター・テリアの祖先は、イギリスにおいて何百年にも渡って存在したスムースコーテッド・ブラック・アンド・タン・テリアだと言われている。

ブラック・アンド・タン・テリアの特徴を持った犬は少なくとも16世紀には存在していた事が確認されている。

マンチエスター・テリアは、ネズミを追走して捕らえる獵犬として、ブラック・アンド・タン・テリアにワイペット、グレー・ハウンド、イタリアン・グレー・ハウンドなどを交配して作出されたと考えられている。

マンチエスター・テリアの背から腰に向かい緩かにカーブした背はワイペット、グレー・ハウンドなどの犬種の影響によるもので、テリア犬種には珍しいものである。

被毛色が似ている為にドーベルマンの血が入っているという説もあるが疑わしい。

「テメエ！ ワン公の分際でオレに向かって吠えるとは、覚悟は出ているのだろうな!?」

そう言つてアヴォスはバルムンクを構える。

「す、すみません！ 許してください!」

「テメエがこのワン公の飼い主か？ ならばテメエからあの世に送つてやるう」

「おつ、お願いします！ お許ください！ お願いします!!」

女性がどれだけ頭を下げてお願いしようとも、アヴォスは聞く耳を持たない。

「死ねえ!」

そしてアヴォスはバルムンクを高く振り上げ、女性の首に目掛けて振り下ろす。

「こら坊主。昼間つから物騒なもん振り回してんじゃねえ」

「ホッ!」

今まさに女性の首にバルムンクが接触しようとしたその瞬間、後ろから来た汚いバイクに乗った、口を隠すような白いひげにサング

ラスをした太ったおっさんがアヴオスの後頭部を殴った。

「て、テメエ……オレを殴ったな？ 今すぐ殺してやる！！」

怒りを露わにしたアヴオス。

「つと、パトロール再開だ。というわけで坊主、このおもちゃは没収だ」

だが、おっさんはまったく動揺することなく、バルムンクを没収し、バイクで走行を始めた。

「あつ、おいこらテメエ！ オレの武器返しやがれ！」

アヴオスは以外に早く走るそのおっさんが乗ったバイクを走って追いかけていった。

「これは僕のなあ！」

「僕が先に使ったなあ！」

10Kほど行った所で、とある自宅の庭の真ん中でパンダの人形を奪い合いっこしている4、5歳くらいの兄弟がいた。

「おいどうした坊主ども？」

ここでやっとバイクのおっさんが走行を止めた。

「ハア、ハア、ハア……」

バルムンクを盗られた位置から、ずっと全速力で走って来たアヴオスは、もうヘトヘトだった。ちなみにこの日の気温は30 くらいだ。

「うゝん困ったぞお。この人形は1つしかないしい……そうだ。どうせ喧嘩の種になるものだ、思い切って捨てちゃおう」

「ハア、ハア、ハア……あ？」

汗をダラダラと身体から出していたアヴオスは、おっさんのしている事に少しだけ興味を持った。

「喧嘩の種になる物なんかいらないよなあ？ よし、じゃあおじさんが捨てておくから」

「……待つて！ 僕より、弟にあげて！」

兄が半分涙目で人形を持ちかえろうとするおっさんを呼び止めた。
「ほお？」

「僕より兄ちゃんにあげて！」

「何言つてんだ！ お前が先に遊べよ！ じゃないと捨てられちゃうんだぞ！？」

「嫌だよ！ 最初は兄ちゃんから遊べよ！」

そして兄弟の譲り合いが始まった。しばらくその光景を見ていたおっさんが、黙って人形を渡しながらかう兄弟に尋ねた。

「それじゃあ一緒に遊ぶか？」

「……うん！」

兄弟は口を揃えてそう言った。

「良い子だ」

おっさんは2人の頭を優しく撫でると、再びバイクにまたがった。

「あつ、バルトさん！ どうもありがとうございました！」

母親らしき人が出てきて、慌てたようにお礼を言った。どうやらこのおっさんはバルトという名で、この辺りでは有名な人物のようだ。

「バルトさん！ たまには警察に任せろよ！」

「ここの警察は信用ならねえからこうしてパトロールしてんだ！」

警察でもないようだ。するとおっさんはどういう人物なのだろうか。アヴオスは段々興味が込み上がってきた。

「なあ、テメエは一体何者なんだ？」

「テメエじゃねえ。バルトだ坊主」

「坊主じゃねえ。ディアヴオロスだ」

「……ぶつ、アッハハハハハハハ！」

2人はこの瞬間、急激に仲良くなった。

そしてもう時刻は18時。日も沈もうというこの時間帯に、2人は海にやって来た。夕日に照らされた海が橙色に輝いている。そして波の音が風の音と共鳴して、静かで優しい音楽を奏でているかのように思えた。

「で、バルトは何をしてんだ？」

「俺は自動車整備士だ。普段はそっちの仕事を優先してやってるんだが、仕事がない時や休みの時は、こうして街のパトロールだ」

「ロンドンはそのなに犯罪が多いのか？」

「アヴオスみたいなヤンチャ坊主がこの街には多いんだ。街の警察は未成年が起こしているような事件はあまり重視してない。それじゃ駄目だと、俺が5年前から始めたのさ。今じゃあそのおかげで未成年の犯罪が減っているって、1カ月前に警察から貰もらったぜ」

いろいろと話してくれているバルトは、それと同時に持っていた釣り竿で、魚がいるポイントまで案内してくれた。

「さて、今日はどんな魚が釣れるかな？」

「オレにもやらせろ」

「もちろんだ」

こうして2人は約1時間ほど釣りを続け、4匹の魚を釣る事が出来た。3匹はバルト、そして1匹はアヴオスが釣ったのだ。

「先に焼いて待ってる。俺はもうちょっと大物が来ないか試してみるぜ」

「おう……」

アヴオスはバルトにバレないように魔力を使って火を出現させた。そして釣った魚を細い木の棒に差し、焼き始めた。

「……アヴオスは良い子だな。ここ5年で会ったヤンチャ坊主の中で一番良い子だ。人間らしい優しさも持ってる。下手な人間より人間らしい。時間に見るとたった6時間だが、何となく分かる。恥ずかしがらずに、自分の思った通りにこれから生きてみる。きっとアヴオスは幸せになれるさ……」

アヴオスはその言葉を俯きながら聞いていた。

「……おっ、来たぞ！　これは大物だ！　くっ、うをおおー！」
そして釣りあげた。だが、それはどこからどう見ても、ワカメを被った長靴だった。水が入っており、さらに重くなっている。そしていろいろゴミもぶら下がっている。

「……………おりよ？」

「ぶっ……………くく……………クハハハハハハハ！　だせえ！　だせえ！
アハハハハハ！」

アヴオスは大爆笑だ。しかしバルトは何故か怒らずに優しい笑顔でアヴオスを見ていた。何故ならアヴオスのその目には、大量の水がこぼれ落ちていたからだ。

アヴオスは初めてだったのだ。バルトのような優しい言葉を聞かされたのは生まれて初めて。悪魔界においては決して味わえない心の旅だった。バルトの言葉をアヴオスは生涯、決して忘れないだろう。

第12夜「人間と悪魔」(後書き)

これが今年最後の投稿です。

最後は、良い形で終わりたいと思い、アヴオスの過去を書きました。
それではみなさん、良いお年を。来年もよろしくお願い致します。

第13夜「兄との再会」(前書き)

読者のみなさま、新年明けましておめでとうございます。
2012年最初の投稿です。

今回は過去篇ではなく、本編がスタートします。

第13夜「兄との再会」

ウルだけでなく、竜雅^{りゅうが} 悠^{はるか}や皇^{すめらぎ} 風牙^{ふうが}を仲間として受け入れたティアの周りは、本人も気づかないうちに賑やかになっていた。そんな4人は、飛行機の中で何時間も世間話や、時には神器の話などとして、暇な時間を潰していると、すぐにパリに着いた。

「はああ！ 地獄から解放された気分だぜ！」

悠が両手を上げて伸びをしている。竜種である悠が、何時間も人がある飛行機の中という狭い空間に閉じ込められていたので、『地獄から解放された気分』と表現しても大げさではないだろう。

「あまりデカイ声で言うな」

周りの人の迷惑になると考えた風牙が、悠を注意した。

そんな悠と風牙を差し置いて、ティアはある事を考えていた。

『あなたは零時様に2度お会いしているはずですから』

上の言葉は前に十六夜零時の部下、秋月紅葉がティアに向かって言った言葉である。この言葉が、ティアの頭の隅に離れずに引っかかっていた。

（どういう意味だ……オレと奴は前に会ったことが？ 確かに日本で会ったとき、不思議と初めてという感じはしなかったが……何か……何か忘れている気が……）

「……ちゃん、お兄ちゃん……お兄ちゃん！」

「あ？ あ、何だ？」

突然のウルの声にティアは戸惑って辺りを見回している。

「もう館に入っても良いよね？ 悠ちゃんも風牙君も疲れてるって言ってるから」

まだ完全に2人を信用していないティアの許可がなければ、館に侵入させてはいけなさと決めていた。

「あ、ああ。オレは、少し神器について探ってみる」

「うん。分かった」

こうしてティアを空港に残して、他の3人は館に入って休むことにした。3人が館に入るとすぐに、ティアはある場所へ向かった。

ここはとあるパリのホテル。

「ラ・モール様。ティアの一味がここ、パリへ到着したようです」

「そうか……神器はもう見つけたか？」

「まだですが、すぐに見つけられると思います」

「そうか……早く……早く来いティアマテウス！　ディアヴォロスの息子よ！」

ラ・モールが少し力を入れると、近くにあった水のガラス瓶が外まで聞こえるような音を出して割れた。

「そう、焦らずとも」

2011年10月13日。フランスの都パリ。エトワール凱旋門の屋上。

「先客がいたか」

「……ここがどこだか覚えているか？」

見知らぬ男がティアに尋ねる。

「エトワール凱旋門だが？」

エトワール凱旋門は、前年のアウステルリッツの戦いに勝利した記念に1806年、ナポレオン・ボナパルトの命によって建設が始まった。ルイ・フィリップの復古王政時代、1836年に完成した。ナポレオンは凱旋門が完成する前に既に死去しており、彼がこの門をくぐったのは1840年にパリに改葬された時であった。古代口

ーマの凱旋門に範を取ったもので、新古典主義の代表作の1つ。

エトワール凱旋門の下には、第一次世界大戦の無名戦士の墓がある。第二次世界大戦ではナチス・ドイツのパリ占領に際してナチス・ドイツ国旗が掲げられ、ヒトラーが戦車で凱旋した。

「では、この顔は覚えているか？」

そう言つて、ティアに背を向けていた男は、ゆっくりと振り返る。

「……おい、ちょっと待て。どういう事が説明してくださいよ……」

ヴェテルギウス

……兄上」

大して驚きはなかった。

そこにいたのは10年前の死神との戦い以来、行方が分からなくなっていたティアの実の兄、ヴェテルギウス（通称ヴェル）であった。

ヴェルはティアとは少し違い、黒色のライダースーツの上に青色のロングコートを羽織っている。髪型はティアは肩まで伸びる長髪。ヴェルは短髪で髪が立っている。

「何故ここにいる？」

ティアは驚く暇もなく質問をする。

「ずっとオレはニューヨークに住んでいた。だが、ある日そこに弟がやって来た。少し調べた結果、弟はラ・モールに復讐する為に魔力を集めており、今は三種の神器とやらを集めて世界中を回っているという」

「答えになつてねえ。10年も姿を消していたかと思えば、急に、しかもこんな所で再開とはな……涙も出ねえ」

そんな事を言っているティアであったが、俯いていて、ヴェルに涙を見せないようにしている。

「……最後の神器、どこにあるか知っているか？」

「今テメエが持つてるその剣（てめえのけん）がそうだ……天叢雲剣（あめのむらくものけん）だろ？」

見てみると、ヴェルの左手に錆ついて使い物にならないような剣があった。

「テメエも分かつてんならさつさとそれをこっちに渡せ」

「……可愛い弟の為だ。そうしたいのが本性なのだが、まだお前の真の目的を聞いていない」

ヴェルは鋭い目つきでティアを睨みつける。

「何の話だ？ オレの目的は10年前から変わらず、ラ・モールを殺すことだが？」

ティアは惚ける様に薄笑いを浮かべる。

「いや違うな。お前は何か別の目的があるんじゃないか？ ラ・モールを殺すだけの魔力ならすでに溜まっているはずだ」

「……………」

ティアはその後しばらく黙ってうつむいていた。

「どうした？ 答えられないか？」

「……めんどくせえ……」

そう言ってティアはバルムンクを構える。

「バルムンク、父の剣を受け継いでも、心は受け継がなかったか」
そう言くと、仕方がないようにヴェルも武器を構える。

「アロンダイト……めんどくせえ武器持ってたな」

アロンダイトは、円卓の騎士の一人であるサー・ランスロット愛用の剣。決して刃こぼれしなかったとされる優秀な剣だが、使用された機会は少ない。これはアーサー王の剣エクスカリバーの兄弟剣でもある。

アーサー王伝説の中でも円卓の騎士「ランスロット」が有しているとされている剣のアロンダイトだが、その出自は様々で、アーサー王が幼少のころに使っていた練習剣だとか、ランスロットを育てたとされる湖の貴婦人が渡したエクスカリバーの姉妹剣だとか、カリバーンだったりとか色々だ。

性能ともに不明の多い謎の聖剣であるが、練習とは言えエクスカリバーと打ち合っても折れなかったという頑強さを誇る逸話が存在する。

一説ではランスロットが逃亡する際、この剣で戦友ガウエインの弟たちを切り殺してしまったことから魔剣に堕ちたとされている。

「お前はバルムンクの歴史を知っているか？」

「……興味ないな」

バルムンクはジークフリートが使っていたと言われる勝利を呼ぶといわれる名剣。ニーベルンゲンの歌（ドイツ抒情詩）に登場する武器で、正確にはジークフリートではなくジーフリートの持つバルムンク。ヴォルスング・サガ（エッダをひとまとまりにした物語）のシグルズのグラム、ニーベルンゲンの指輪（ワグナーの歌劇）のジークフリートのノートウング。

ヴォルスング・サガによれば、オーディン（北欧の主神）が、「この剣を抜いた者に与える」と言ってリングの木に剣を突き刺し、それをオーディンの血を引くヴォルスング家のシグムントのみが抜く事が出来たとされる剣だが、一旦はシグムントがオーディンの怒りをもって粉々に砕かれてしまった。

勝利を呼ぶ剣を失ったシグムントは戦死。

やがてシグムントの息子シグルズが母親から授かった剣のかけらから新たな剣を鍛えます。鍛えたのは育ての親であるレギンで、この剣で邪龍ファフニールを打ち取った。

ちなみに「ニーベルンゲンの歌」はキリスト教色が強く北欧神話の神オーディンが登場する筈は無く、ニーベルンゲン族の2人の王子が決闘する際に調停を頼まれて、その報酬にジーフリトがバルムンクを得ている。

「時間稼ぎか。それとも、オレと戦うのがそんなに嫌か？」

「弟と殺し合いた^{たたか}いたい兄などいない」

「そうか……相変わらず父上と同じで甘ったるい。オレは甘ったるい食い物は好きだが、甘ったるい奴は大嫌いなんだよ」

「オレとは逆だな。甘ったるい食べ物は大嫌いだが、甘ったるい奴は好きだ」

そして2人はお互いの武器を交換合う。

第13夜「兄との再会」(後書き)

大事な連絡です。オリキャラ募集については締め切らせていただきました。

第14夜「真の姿」(前書き)

タイトルからでも分かると思いますが、今回はティアが変身してしまします。

本来の姿に変身してしまします。

第14夜「真の姿」

両者はともに剣を振り下ろした。凱旋門の屋上で月という光に照らされている。それはまるで舞台を彩る照明のようだ。

ヴェルは弟の目的を知るまでは神器を渡すわけにはいかず、ティアは兄からなんとしてでも神器を奪いたい。これではもう見ている側からすると、どちらが敵なのか味方なのか分からない状態だ。残像を残し、高速で移動しながら剣を振るわせる悪魔兄弟。それは果てしなく悲しい戦いでもあった。

「どうした！？　しばらく会わねえうちに腕が鈍ったか！？」

何故、兄弟同士で戦わなければいけないのか。運命は2人にどんな道を歩ませようとしているのか。それは本人達はもちろん、誰にも分からないかもしれない。

「何故隠すのだ弟よ！　我ら兄弟の間では隠し事は無いはずだ！」

2つの剣、バルムンクとアロンドイト。伝説上だけでもかなりの魔力を纏っていると言われる。そんな剣同士が接触し合う瞬間に響き渡る金属音は、凱旋門の屋上から夜のパリの街へと響き渡っていく。

「ハッハー！　押されてんぞ兄上様ア！」

次第にティアの方が押し始める。だがヴェルも負けるわけにはいかず、さらに力を振り絞った。

「ハアア！　まだ終わらん！」

力を開放したのか、ヴェルの身体が黄色の光に包まれた。

「金十字斬！」

ヴェルはアロンドイトを「十」の字に振り払った。すると黄色の光が「十」の形のとなってティアに襲い掛かる。

「青十字斬！」

そしてティアもヴェルと同じ技を使った。違うところはヴェルのように黄色ではなく青色というところだ。

両者の技はトラックが正面衝突したような衝撃音とともに、ものすごい光や煙とともにカツ消えた。

「くっ……」

ヴェルはその煙に視界を遮られる。

「終わりだ！」

その瞬間、ティアが煙の中から現れた。高々とジャンプしたティアは、空中で大車輪のように高速で回転すると、そのままヴェルに避ける暇を与えず体当たりのようにぶつかった。

「空道転輪くうだてんりん！！」

あまりの破壊力に凱旋門の角が4つあるうちの東側の角が崩れ落ちた。それも雪崩が起きるかのような騒音を立てたもので、車で走行していた人達が何事かと車を降りてまで集まってくる。

「くっ……てい、ティアマ……テ、ウス……」

凱旋門の屋上が4分のい程崩れ落ちた為、ヴェルもティアも地上にいた。その地上で倒れながら、油断したような悔しさが見じみ出るような声で弟の名を呼ぶ。

「だからテメエは昔から甘いんだよ」

ティアは砂煙の中から歩いてきてヴェルの右腕を踏みつける。

「どんな事があっても弟の命の方が大事か？ 神器さえ守れば弟を傷つける必要はない？ 甘ったるすぎて反吐が出るんだよクソ野郎！！」

ヴェルの甘さに我慢していた怒りが頂点に達したのか、ティアは実の兄であるはずのヴェルの顔面に蹴りを入れた。

「ッ！！」

「甘い！ 甘い！ 甘い！ 甘ったるいって言ってんだよ！！」

その後も怒りをぶつけるようにヴェルの身体中に蹴りを入れ続ける。壁は崩れたり、地面はへこんだりしてもうめちゃくちゃな状態だ。そんな事をしていると当然人が集まり始める。その数はヴェルに蹴りを入れることに夢中で気がつかなかったが、十数人に達していた。

「ハア、ハア、ハア……クソ汚物共が……！」

人間達に気がついたティアは、バルムンクを手に持ち、鋭い目つきで人間達を睨みつける。

「や、やめ、ろ……人間、たち……は、かんけい、な、ない……」

「マジでウゼエんだよクソ汚物共……！」

そして強大な魔力と大きさを誇る斬撃破がバルムンクから放たれた。しかしそれはものすごい爆発音と目を背けるような光と共に消えてしまった。

「いいがげんにしろティアマテウス。理由もなく人間を殺すことは俺が許さん」

そこにいたのは空色に輝く剣を持った銀髪の男。そう、十六夜零時だ。

「零時……零時イイ！」

その時、零時の姿を見たティアの脳裏に、ある記憶が蘇る。

『そうか……この娘がディアヴォロスとルシアの間に生まれた子供か。今ここで殺しておいた方がよさそうだ』

『貴様には何の恨みもないが、我が死神一族のため……ラ・モール様のために……』

『……ではな悪魔ティアマテウス。いつか死闘を繰り広げる時が来るだろう……それは十六夜の月が闇に浮かぶ頃に……メリークリスマス』

ティアの中にある鎖が外れた。すべてのピースが揃った瞬間だっ

た。

「そうか……思い出した。テメエが……テメエがウルを」
何故か怒りを面に出さない。

「どうやら、思い出したようだな。正直、忘れていると分かった時はがっかりしたぞ」

零時は首を斜めに傾けて、ティアを呆れたような表情で見ている。
「安心しろ。このクズを片付けたらすぐに相手してやる」

そう言つて、ティアはヴェルに視線を移す。

「や、めろ……ティア、マテウ……ス……」

ヴェルは必死にティアを止めようと足にしがみつく。それでもティアの意思は変わる様子はない。ただ愚かな者を見下しているような冷たい瞳。今にもあざ笑うかのような唇。

「止せ。ヴェルは関係ない」

「悪いが、オレは昔からこいつとは馴れ合えないと思ってたんだ。
親父と同じく人間を愛そうなどと、下らねえ事を考えた罰だ」

「……………」

零時は何も言わず、ただティアを見つめている。

「現に親父は死に、こいつの灯も間もなく消える。10年ぶりの再会だが、もう2度会うこともないだろう……じゃあな」

そしてティアはバルムンクの先をヴェルの心臓に合わせる。

「ちっ」

零時はやめる気のないティアを止めるべく、自らの武器をダーツのように投げ、バルムンクをティアの手から放した。

「理由もなしに人も悪も殺すなどということが。それとも、先に殺してほしいのか」

ティアは独り言のように小さい声で呟くように言う。

「今日貴様と戦うのは俺ではなく……」

「あちきだよん！」

突然零時の後ろからピンク色のドレスを纏った女の子がウサギのように飛び出してきた。

「テムエか」

「秋月紅葉でーす！　パリに着いたらニューヨークでの続きをやる約束だったはずですよ！」

「いいだろう。来いよ、相手してやんぜ」

ティアは挑発するように左手を動かして誘導する。

「すう……全員ここから逃げろ！！　でなければあの黒服の男に殺されるぞー！」

零時がこの場にいる全員に聞こえる大声を出した瞬間、その場にいた人間たちはあつという間に悲鳴を上げながらいなくなってしまうた。

「余計な事をするな。観客がいたほうが盛り上がるだろうが」

「戦いは遊びではない。そう油断していると、死ぬのは貴様だぞティアマテウス」

「心配無用だ。すぐにこいつを片付けてテムエの元に行つてやる。それまで、命乞いの練習でもしておけ！」

掛け声とともにティアは紅葉を斬りに行った。

「よっ！」

しかしヴェルとの戦闘によって、多少の疲れがあるせいか、紅葉にはあつさり最初の斬撃を回避されてしまった。

「全然ダメですね。スピードが以前より格段に下がっています」

「期待に応えられるようにしてやろうか？」

「出来るんですか？」

「ああ……すう……ハアアアアアアアアアアアアア！」

力を解放しようというのか、ティアの周りには嵐のように青い光が蔓延している。そしてその光と同時に、ティアの風貌が少しずつ変わっていく。

「ハアアアアアアッー！」

「変わった……」

「ハア、ハア、ハア……こ、これがオレの真の姿だ」

ティアの瞳の色は両方赤色に代わり、黒色の肩までしか伸びてい

なかつた髪が腰まで伸びている。そしてもつとも変わったのはその服装。これはもはや服装というより装備とっていいだろう。鎧姿のようだが、服のようにスマートで動きやすそうだ。青色に染められており、一部スイカの模様のように黄色が入っている。マントもあり、バルムンクも大剣と化している。

「I will enjoy……（楽しもうぜ……）」

第14夜「真の姿」(後書き)

誤字脱字を見つけたらお教えください。

こんなシーンを増やしてほしいなどの希望がありました場合も、お教えください。

第15夜「圧倒的な力」（前書き）

ティアの圧倒的な力を目の前にして震え上がる紅葉。
そんな紅葉を、ティアは容赦なく攻撃を与える。
そしてそこに、予想外の人物が姿を現す。

力を入れたのは、どうやらティアは、長年掛け集め溜めていた神器の魔力を吸い取ったようだ。神器を吸い取らなくても、現在の姿になることは可能だった。だがそれは、髪が伸び、瞳の色が赤に変わるといっただけの変化だった。服装が変わるだけではなかった。しかし今回はこうして服装も鎧姿のようになった。それはティアの持っている魔力が極限を超えた証。

「3、4つの神器の魔力を吸い取ったところで、オレの計画に負傷は出ない」

「こうなったら、こちらも本気でいかなくてもならないそうですね」
そう言って、紅葉は自分の持ち武器、炎龍刀を構える。灼熱の炎を纏ったその刀は、ありとあらゆるものを焼き尽く^{きりぬ}す。

「炎龍の舞！」

それはまるで龍が舞っているかのごとく優雅に、そして華麗に舞い踊っている。その龍の形をした炎は、紅葉が炎龍刀を動かすことによって操作することができる。

「我が身に舞い降りし炎龍よ、目の前の穢れを焼き尽くせ!!」

そして紅葉の炎龍がティアを襲う。

「嘗めるな! これぐらいの炎でオレが焼けると思ったか!？」

ティアは自分に向かってきた炎龍を、バラムンクで薙ぎ払った。

「ふっ……」

しかし紅葉の表情は変わらない。

「なっ! 龍が後ろから!？」

後ろに熱を感じたティアが振り返ると、そこには先ほど斬ったはずの炎龍がいた。それも自分に当たるギリギリのところで、ティアは回避することに成功した。あと少し気づくのが遅れていたら、無傷では済まなかったかもしれない。

だがそれでも、ティアのほうが有利な事には変わりはない。

「めんどくせえ炎だな。まさか、狙った敵は焼き尽くすまで追いかけて続けるとかか？」

「その通りです。あちきを倒さない限り、この炎龍を消すことは…

…」

「そうか、お前を消せばいいのか」

ティアは瞬時に紅葉の後ろに移動する。

「いつの間に！　でもあちきには炎龍がいる！　下手に手出しは…」

…」

「ウゼエ」

「うぐっ！」

しかしティアはそんなことは関係ないかのように、紅葉の首根っこを、その左手で掴み、自分の頭より高く、紅葉の頭を上げた。そのとき、紅葉はうつかり炎龍刀を地面に手から放してしまった。

「えっ、えんりゅう……！」

「確かにテメエを殺せば、炎龍の動きは止まる。だが、武器が使えなければ炎龍は動くことができない」

今の炎龍はまるで指示がなく、何をしたいのか分からずにいる子供のようだ。

「さあ、処刑の時間だ」

今このとき、紅葉の命の灯が消えようとしている。

「てい、ティアマテウス、や、やめろ……」

後ろでうめき声の様に自分の名前を呼ぶので、誰かと思い振り返ってみると。

「誰かと思ったら死にぞこないのお兄様じゃねえか。そう焦るなつて、テメエはちゃんと殺してやるから、黙って待ってろ」

そして再び左手に力を入れる。

「あつ、が、ががが……（死にたくない……）！！」

紅葉は必死で死にたくないとい心の中で叫び、ティアに抵抗する。

（やめろ……！）

「死ね」

その瞬間、鈍い音がした。血は吹き出し、首は潰れ、頭はゴロゴロと5、6Mほど転がった。

「ふう……まず1人……」

紅葉はあっさりティアに殺されてしまった。しかし紅葉もまた、殺戮が大好きで、何の意味もなく人間たちを殺してきた罰が下ったのかもしれない。

「……な、なんて事を……」

「さて、次はテメエの番だヴェテルギウス」

ティアの視線はすぐ近くで身体中から血を流して倒れているヴェルに向けられた。

（くっ、ここまでか……）

ティアは一步……また一步近づいてくる。ヴェルにもう逃げ場はない。

「せめてもの情け、オレの手で逝かせてやる」

そしてティアはバルムンクを振り上げた次の瞬間、誰もが予想しなかった乱入者が現れた。

その者は、ティアがバルムンクを振り下ろし、あと少しでヴェルに接触するというギリギリの瞬間に、ヴェルを抱きかかえてティアの攻撃を回避した。

「……誰だあ！！ オレの楽しみを邪魔する奴はあ！！」

「貴方は実の兄君に手を掛けるほどの悪魔でしたか？ わたくしにはそうは思えないのですが」

ヴェルを抱きかかえていたのは、紫色のポニーテールに、華やかな花々が描かれている浴衣を着た、とても美しい女性であった。一目見れば、その緑色の瞳に吸い込まれてしまいそうになってしまう。

「誰だテメエは？」

しかし、今のティアに相手の美しさなど見えていない。

「わたくしは十六夜零時様の部下、あさぬましおん浅沼紫苑でございます。どうかお見知りおきを」

敵であるティアに頭を下げてご丁寧にあいさつをする。

「そうか。確か、優秀な部下が2人いると、その肉片に聞いた」
ティアはまだ血を首から流している紅葉の遺体に指さす。

「秋月……勝てないと判断すれば、退却してもいいという命令でし

たのに」

「肉片によれば、テメエはあの肉片より弱いらしいな」

ふと、紅葉がそんなことを言っていたのを思い出した。しかしその言葉を聞いた紫苑が、ムツとしたような顔で言った。

「それは聞き捨てなりませんね。わたくしが秋月より弱い？ いかわたくしを追い越して、零時様と結ばれると申しておりましたが、すでに越したつもりでいましたか。だから負けたのですね」

予想外の言葉だった。ティアはてっきり、紅葉の言葉を信じこんでしまっていた。冷静になって考えれば、最初に主人公の前に現れる敵キャラは、あっけなく殺されると、前に日本のアニメオタク（アニメオタ）とかいう奴が言っていたような……。

そして強い奴が弱い奴より先に外向いてくるのもおかしい。零時の命令なら、ラ・モールがティアと戦いたい事は知っているはず。そこまで考えてみると、紅葉はただの雑魚という事が分かってしまう。

「ああ……じゃあテメエのほうが強えと？」

「当然です。ですが、今は試している暇はありません。今回の任務は、ヴェル様を無事、零時様の元へ届けること。貴方と戦えという命令は受けていません」

まるでロボットのようには忠誠心が高く、言われたことを忠実にこなす。オレもこんな部下が欲しいと、ティアは思ってしまう。

「なるほど。零時も良い部下を持ったな」

「ですが、いずれ貴方とも戦う日が来るでしょう。その日は、もうさほど遠くはないでしょう」

最後にそれだけ言うと、紫苑はヴェルを抱きかかえたまま、夜のパリへと姿を消してしまった。

「……浅沼紫苑……面白れえ……」

とりあえずティアは変身を解き、いつもの状態へと姿を変えた。

「ま、楽しみを先延ばしにするのも悪くない」

そしてティアもまた、夜のパリの街へと消えていった。そのあと

すぐにパリの街には日が昇り、
壮大な光が街全体を包み込んだ。

第15夜「圧倒的な力」（後書き）

誤字脱字があればお教えください。

次回は懐かしのあの人物に、新たなキャラが登場します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6238y/>

悪魔の妹ウル

2012年1月13日19時57分発行